目次

法華經の倫理觀（時言）……本多日生
政道と佛教……本多日生
法華三聖に對する感想……井上哲次郎
本化の慈光……笹川日堂
記事報道十數件……
法華經要文講義……本多日生

第廿六年四月號

時言

法華經の倫理觀

本多日生

一、宇宙の實相

いま一つは宇宙の實相に就てでありますが、これも、宇宙は本來無一物であるとか、或は唯だ吾々の心の上に宇宙は存して居るけれども、心を滅したならば宇宙は無くなるとか、或は又地水火風空の五大が存在して居るものであつて、その他の物は一時假に和合して居るものであると云ふやうなことが、佛敎で云ふ宇宙の說明のやうに思つて居る人があるけれども、さう云ふ所には道德は出て來ない。宇宙は心から出來て居ると云ふことであれば心が滅すれば空虛となる、或は地水火風空の五大が寄合つて出來て居るものであると云ふことになれば、總て皆物質であるから、唯物主義で、何もないと云ふことになる。さう云ふ思想は決して釋迦が說いた敎ではない、さう云ふやうな思想が佛敎に出て居るのは、初めの方に出て居るのである。吾々が演說をするにも、物質生活の方面からのみ言へば、人間が腹空つて居つては話をすることも出來ないと云ふことはそれは眞理である、本來無一物と言ふことの必

要なこともある、けれども部分的説明を以て佛教の全部とするから誤つて來るのであります。一部分に囚はれないで、もつと大きく考へて見ることが必要であります。釋迦が教を纏めて説いたものに依れば、宇宙はさう云ふやうなものではない、宇宙は総てのものゝ相關の理、互具と云ふことから起つて居ると云ふのであります。互に具はつて居つて、一事一物と雖も相離れるものでないと云ふことを宇宙の原則として説いて居る。差別して種々に現はれて居るけれども、究極する所は宇宙は一妙法である、一實相であると云ふのであります。皆關聯して居るものである、宇宙は大相關であります。人間の身體のやうなものでも、手と足と別に考へた時には、足が怪我したからと云つても手は之を笑つて居る、「ざま見い」と云ふやうな風に考へる。併し怪我した足がうづいて熱を持つて來ると、それが身體全身に及んで手がだるくなる。手に腫物が出來たとすると、今度は足が「ざま見い」と云つて居るが、手がうづいて來ると全身に熱を持つて飯も食へないと云ふことになる、飯が食へないから足が痩せる。それであるから、この相關互具と云ふことは宇宙を觀る上に於て一番大事なことであります。

一二、色心相關不二

そこで先づ宇宙はどう云ふ風なものかと言へば、色心と云ひまして、色と云ふのは物であります、物と心、之を佛教では色心と云つて居る、さうして是は色心相關不二と云ふことを説くのであります。色心の二つは離れるものではない。宇宙の本原に戻り、宇宙の始めを考へますると、一番初めに宇宙は色心の二つがあつて、是は一元であります、決して唯物とか唯心ではない。唯心であると云ふならば世の中は皆夢である、唯物であると云ふならば、現にこの通り物ならざる所の魂であるのに、之を唯物と云ふのは、精神の存在を否認するの甚しいものである、そんな事を言つても現に魂がある。是は物と云ひ心と云ふものは、孰れも始めなく終りなく存在して居る實在である、その二つが互具相關して居るから色心不二の一元と云ふことになる、根本は一元でありますが、之を分ければ色心の二つである、それを色と心との二つに説明するから、色と心とは別々に在るやうに思ふが、華嚴では一心法界に徧在すると云ひ、法華では佛性體遍と云つて居るので、一切の中に精神は悉く徧在して居る。人間の身體で考へれば分る、頭だけに心が在ると云ふものではない、神經系を傳つて全身に行亘つて居る、即ち體遍して居るのである、全體に滿ちて居るのである、腕に在る、頭に在ると云ふことは言へない、指の先にも在る。眞實を言へば身體の外にまで出て居る、身體の中に押籠められて居るやうに思ふのは、それは人間の想像であります。何處に紐で括り付けてあると云ふものではない。死んだ時に息を引くと一緒に出て行くものではない、それなら大きな欠神をした時に出て行かなければならぬ。大きい小さいに依つて精神には影響はない、子供の時分には裏長屋に住んで居るやうで非常に狹かつたが、大きくなつたら表通りへ出たやうだと云ふやうなものではない。之を大きくしたならば盡十方に行亘るので、根本の心から言へば、宇宙の總てにこの心が遍滿して居るのである。それで、この全體にある所の宇宙的の心と、部分的の狀態に現れて居る心とは同じものであると、法華經には教へて居るのである。今こゝに樓兵衛になつて這入つて居る心と、全宇宙に遍滿して居る心とは、違ふかと言ふと、違はない。迷へるが故に自分の心は樓兵衛の心だと思ふけれども、一たび悟ればその心が全法界を包容する所の心である。宇宙の心と個人の心とには優劣が無いと云つて居る。一方から言へば宇宙は一の大精神である、それが個々の上に働いて居るのであつて部分と全體との關係が如

何にも不思議であることを、之を一念三千と申すのであります、一念とは小さい部分に在る心を指し、一切の總てに亘るから之を三千と云つて居るのであります。吾々の部分的の心と全宇宙の心とは全く一つである。全體を一つの心として考へた時も、部分から全體を考へた時も同じことである、そこが所謂妙であります。それ故に華嚴經には須彌芥子相入と云ふことを云つて居る、須彌山の中に芥子粒が這入るのは問題でないが、芥子粒の中に須彌山が這入る、どちらも這入ると云ふのて須彌芥子相入と云ふのであります。或は入我我入とも云ふ、我に入り我入ると云ふのて、全宇宙が自己に這入る時が入我である、我入と云ふのは自己が宇宙の大精神の中に這入る、それが入我我入である。自分の一端に全宇宙があり、全宇宙に自分の一端がある。

一三、同體の大悲

さう云ふ關係が如何にも妙て、之を妙法と云ふ言葉で法華經には說いてある。之を委しく言へば法華經の哲學でありますから、なか〳〵面倒でありますけれども、この中に含まれて居る所の倫理的の基礎は何處に在るかと言ふと、是は同體の大悲と申して居る。同體の大悲を猛發せよと勝鬘夫人は云つて居るのでありますが、同體の大悲と云ふのは、一切が自分と相離れないものであると云ふことを原則とするのであります。母親が子供を可愛がると云ふのは、どう考へても他人とは思はれない、自分の身體から出て、自分が育てたのであるから、子供が苦しいのは自分が苦しいのである、子供が牡丹餅を食つて喜んて居ると自分も一緒に喜ぶと云ふ樣なことになる、身體は別であるけれども元來は一つであつた、彼の幸福は我れの幸福、彼の苦痛は我れの苦痛である。この精神を押擴めて行けば、自分の子ばかりでなく、隣の娘が自動車に轢かれても矢張り可哀さうだと思ふて、そこに同體の大悲が及んて行かなければならぬ。資本と勞働の關係に於ても矢張りその通り、勞働者の不幸な狀態を見ては、資本家に於ても、自分の子があゝ云ふ有樣であつたらどうかと云ふことになる。餘所の娘を子守りに雇ふてひどい目に遭はして居るけれども、この娘にも、自分が我が子を愛するが如き慈悲を持つて居る親がある、彼も人の子だ子守奉公に寄越して居るけれども、母親は何と思つて居るだらうと思へば、親切にしてやる心が起る。姑婆さんが嫁に來た娘を窘めるけれども、この嫁にも可愛いと思つて居る親があるのであると思へば、自分の娘に對する精神を以て可愛がらざるを得ないことになる。一切のものが相關互具すると云ふ所に、そこに同體の大悲が現れて來るのであります。さうしてその同體の大悲を猛發すると云ふことが、倫理的基礎になつて居るのであります。

一四、法華經の圓慈觀

更に之を他の一方から言へば圓慈と云ふのであります。之も前に申した相關互具の意味合から自分の精神に慈悲が働いて來る時に圓慈と云ふのであります。非常に牽固なる眞理があつて、そこに倫理の根據があると云ふことが圓慈であります。他の言葉を以て言へば、仰いて天を眺めた時に、そこに矢張り優しい精神が流れて居ることを認むるのである、俯して地を見てもそこに偉大なる慈愛の溢れて居るのを認むるのである。儒教で申しますれば、天道人を殺さずとか、或は地は萬物を生ずるとか、生々化育と云ふやうな、日々太陽が出てお照しになり、光と熱とを與へて吾々に幸福を與へる、光が無く熱が無かつたならば吾々はどんなに不幸なものであらうか、天地の精神を代表して吾々に光と熱とを與へる、それが爲に菜も

出來れば花も咲く。若し光と熱とが無かつたならば一草一木も生じない、一草一木も生じないと云ふことになれば、吾々は飢え死ななければならぬ。今日、寒いと言つても最早木の芽が催して居りまするし、地を見れば青い草が生えて居ります、是が天地が吾々を助けんとする大精神なりとして考へる、それが圓慈觀てあります。能く々々研究すればそれが眞理てあります。冬が來れば寒い、寒いから冬などは來なくても宜いと思ひますが、冬があつて春の花が咲き榮つ葉も出來るのてあります。四時が運行することに依つて總てのものが發育し、實つて歳に收めることになるのてあります。是がいつも同じ有樣てありましたならば決して萬物を生ずることは出來ない。宇宙の大精神を左樣な溫味ある方面に見るのが法華經の敎てある。この精神が涅槃經に於ては非常に能く現れて居るのてありまして、涅槃經に於て圓慈の說明が委しくしてあります。それを一方から考へまするとと、宇宙の大精神を體現して居るものが佛として出現される、又吾々に於ては佛性として活動する、吾々の佛性が完全に發育し活動するならばそれが即ち佛てある。其中のやり損つた者が煩惱業苦の變態を呈して居るのてある。之も煩惱を解脫し惡業を遠離し苦痛を滅したならば、そこに立派な佛性を持つて居ることを認めるのてあります。總ての者がさうなつたならば、全宇宙は向上の大舞臺てある。故に一たび達觀すれば「我が此の土は安穩にして天人常に充滿せり」と法華經に說いて居る。全宇宙が何處てもが淨土てある、この世界がその儘直ちに淨土てある。迷へる者があり苦しむ者があるのは是は變態てある、盡十方世界が悉く淨土てあると云ふ風に見て行くのが、法華經の圓慈てあります。佛はこの眞理を應用して、法華經に於て宇宙の實相を說いたのてありますが、それは前に言ふ通り、一つは佛となつて現れ、一つは佛性となつて現れますからして、宇宙の說明が取りも直さず

矢張り佛の說明となり、佛性の說明となるのてある。宇宙と云ふものから如來を取つてしまひ、佛性を有つて居る吾々を取つてしまつたならば、只だ石や瓦の世界となつて冷たいものとなるが、宇宙は決してさう云ふものてない。宇宙そのものが活躍して居るのてあつて、それが如來てある、如と云ふのは宇宙てある、それが人格を取つて活動するから如來と云ふのてあります。如來を忘れて宇宙を說いて居るやうなものは、さつぱり駄目てある。日本の國體を說くに皇室を忘れて國體を說いて居るやうなものてある。日本の山や、日本の川を以て日本の國體を說くことは出來ない、日本の國體を說かんとするにはどうしても日本の皇室を忘れることは出來ない。日本の國體は皇室があり國民があり、而して領土もあつて國を成して居るけれども、大切なるものは皇室と國民てある。日本を研究する上に於て、日本の山や川を研究しただけては、その研究は十分てない、最も大切なるものは皇室てあり、もう一つは國民てある。それと同樣に、この宇宙を論ずるに最も大切なものは一つは本佛の實在てあり、いま一つは佛性の顯動てある。大和民族は佛性に似たる大和魂を有つて居る、而して上には無始無終の本佛に均しき皇室を戴いて居る。是が一つの倫理の根據を成して居るのてある。

一五、本佛の慈悲

いま一つは佛の問題てありますが、それはこの中から自ら現れて來るのてある。この全宇宙の實相その儘を語り、そのものゝ現れとして活動して居るものが如來てある、佛性の方から言へば、その內具の完全なるものを現し了つたものが如來てある。それが誰に依つて示されたかと言ふと、法華經では釋迦牟尼佛に依つて顯本せられた、それが根本的の佛てあると云ふことを說示して居るのてある。佛の存在の意味は

哲學的の問題でありますけれども、その佛の活動は道德性になつて來るのである。本佛が存在するか否かと云ふ事は眞理上の問題でありまするが、その存在する如來が何をするかと云ふ事は、それは道德的の働であります。本佛には三方面があつて、眞理に屬する側と智慧に屬する側と、慈悲に屬する側とあるが、その三方面の中に於ては慈悲を正面に置いて法華經は說いたので、それが壽量品の佛であります。「每に自ら是の念を作す何を以てか衆生をして無上道に入り速に佛身を成就することを得せしめんと」何を以て衆生を救はうかと云ふ精神である。每自作是念が慈悲の精神である。佛の人格は勿論智慧もあり眞理にも合して居るが、何が表に働くかと言ふと慈悲を表にして働いて居る、それが即ち道德の根據である。例へば呪の神と云ふのがある、三りんぼうと云ふものがあります、固より迷信ではありまするけれども、家を建てると三りんぼうが怒つて家を倒すと云ふことがある、さう云ふものであれば社會主義のやうな神樣である。所が釋迦如來にはさう云ふ側は一つもない、非常に恐ろしい提婆、阿闍世のやうな惡人に對しても徹底的に慈悲を失はないのである、どのやうな困難があつてもそれを打破つて慈悲を行はんとするものである、それが壽量品に說かれて居る所の佛である。そこで吾々がこの本佛を信ずることになると、即ち慈悲に結付くのである、吾々の精神が本佛の慈悲に結び付くのであるから、さうするとその信仰が矢張り道德化して來るのであります。佛樣の有難い精神に自分の心が引付けられ、感化せられ、さうして自分の精神が和らいで來るのみならず、他の人に向つて慈悲の作用を現はさうとする。信仰に依つて釋迦如來の手と握り合ふから、釋迦如來の手の溫もりが通つて自分に慈悲が流れて來る、その慈悲を以て憐れな者を救はうとして働くが故に、釋尊の慈悲を本として信仰に立つ時に、總てが道德化してしまふ。眞に本佛釋尊を信仰するならば、釋尊の慈悲が自分の全身に流れ通ふのでなければならぬ、亦さうなるのであります。そこで壽量品の佛は無論慈悲が本になつて居りまするが、それから導かれた人が亦皆慈悲の働になつて行くと云ふことは、日蓮上人の信仰を以て之を證明することが出來る、日蓮聖人は、「日蓮が慈悲廣大なれば」と云ひ、或は法華の行者を云ひ表す言葉として「させる世間の科なくして慈悲あらん僧」と云ひ、法華の行者は慈悲と云ふことが中心になつて居る譯である。さう云ふことでありますから、その意味が法華經の修行の場合には最も明白に現れて來ます。要するに信ずる本佛が一切の道德の根原を爲すので、日本に皇室を戴いて大和魂が出來たやうに、本佛を戴く所に道德が働いて來る。儒敎で申せば天道明德である、天道明德は道德の根據である。明德が佛性に當り、天道が本佛に當るのである。それを一層哲學的に根據を說明したものが佛敎である。

一六、法華經と世間の道德

然らば是が德目の上に於てはどう云ふ具合になつて來るかと言ふと、法華經は一乘の敎を說きしこと故に、世間の道德をその儘活して居るのである。世間の道德上にある事は法華經と一致することを認めるのである。それ故に印度に於きましては印度の社會道德を決して破壞しないのである、佛敎は印度の傳統的道德を維持して參りました。さうしてそれに根柢を與へそれに意義を與へて、決して破壞しない。更に支那に渡りましても、支那の儒敎の道德を佛敎に於て破壞したことはありませぬ。日本に來ましても、佛敎が儒敎の道德、及び日本の道德を維持した點は非常に多大なるものであります。日本の國體を擁護するとか、或は忠君の觀念を養ふとか、或は武士道を養ふと云ふことに就て、實際に研究なさつたならば、その大

事な事柄には皆佛教が關係して居るのであります。武士道の精神の眞實の所は皆佛教が教へたのであります。是は鎌倉時代に於て心の問題から矢張り武士道は鍛え上げたものでありまして、首楞嚴經にある所の直心を本としたのである、是は今ても日本の軍人などには忘れてならぬ事であると思ひます。軍人の勅諭にも「一の誠心は又五ヶ條の精神なり」「心だに誠あれば何事も成るものぞかし」とありますが、之を本當に說明したものが首楞嚴經であります。一と通りこの言葉は何所にもありまするが、徹底的に說明したものは首楞嚴經であります。「心だに誠あれば何事も成るものぞかし」と云ふ、それが大和魂になつて來たのであります。又忠君の觀念に於ても矢張り佛教が非常に助けて居るのであります。國體は勿論のことであります。儒教は國體を破壞する點もあつた、佛教は最初から日本の國體擁護の地位に立つて居るのであります。殷の紂王を伐つ爲に武王が師を起した時に、伯夷叔齊は、臣として君を弑することはいけないと言つて諫めた、それが爲に殺されやうとしたが太公望が諫めて事なきを得たけれども、そこが曖昧である。周の武王を尊んで色々言ひ譯をして居るが、頗る曖昧である。結局君を弑した周に味方して居るのであるから、日本の國體とは合はないのである。佛教の方はそこが明かになつて居りまして、その點を佛教徒の手に依つて發揮せられて居る。殊に日蓮聖人の如きは前後に無い程日本の國體觀念を發揮して居るのであります。是は皆佛教の思想から出て居るのであります。

一七、緣起の思想

どう云ふ具合に佛教からさう云ふ思想が出て來るかと言ふと、是は法華經に於ては緣と云ふ字を以て說明して居る、即ち佛種從緣起と說いてある。緣起が宜いとか惡いとか云ふことがある、緣起と云ふのは多く惡い方に使つて居りますが、この緣起と云ふことは大變大きなことであります。是が道德上の說明になつて居る。日本の國には日本の國に適した所の緣があつて色々の道德行爲が起つて居る。建國の事情があつて、その緣に依つて國體が出來て、それに依つて大和魂も出來、日本の風俗習慣が出來て居る。その點を佛教は非常に尊重して、決して他の國に出來たものをその儘移さうとはしない。日本には日本の緣があつて、さう云ふ事情が起る。一切の人が道德に行くのも、緣があつて行くのである、釋迦が出て一乘の教を說いたが、この法華經は東北に緣ありと云つてある、法華經が日本に來て弘まると云ふことも、釋尊第一の弟子が日本に來て日蓮となると云ふことも、色々緣が輻輳して現れて居るのである、そこが佛教は非常に重きことになつて居る。日本の惟神の教、聖賢の教、と融合を取つて發達助長を圖つたのは法華經である。その意味は日蓮聖人に於てこの色彩が最も能く現はれて居るのであります。彼は嚴格なる法華經の行者であり、佛教に絕對の信仰を持つて居るものであり、如何なる事ても佛教の教に反すれば身を粉にしても主義を貫かんとするものである、一點迎合すると云ふやうな者ではない、いけないものならばどんな困難があつても戰ふ人である。然るに日本の國體に對しても儒教に對しても尊敬をして進んで行く、是が法華經の開會の教であつて、世間の道德に就てはこれと調和して行く大精神である。この世法と佛法との關係は何から出て來るかと言ふと、緣から出て來る。或は天然の關係、或は歷史上の事實等、種々なる事が寄つて出て來るのであるから、その緣を尊重しなければならぬ。どうしても許せぬ事は改正しなければならぬが、成べく改めないが宜い、改造が一番良いと云ふのは間違つて居る、改造しなくても宜い事は改造せぬが宜い、そこには一貫大道と云ふものがある、「斯の道は實に我が皇祖皇宗の遺訓にして子孫臣民

の倶に遵守すべき所、之を古今に通じて謬らず、之を中外に施して悖らず」とありますが、古今に通じて謬らざるものは改造せぬが宜いのであります。無暗に變へさへすれば宜いと云ふものではない、變ゆべからざるものはそれは緣である。呑ン兵衛の親爺と、かみさんとの間に子供が出來た、飛んだことをしたと思つても仕方がない、呑ン兵衛の息子となつて來た時にはその親に對して孝行を發揮せんければならぬ、やり損つたと言つた所がどうすることも出來ない、孝行をしろと云つても親が呑ン兵衛ではたまらないと言つた所で、併し出直すと云ふことも出來ない、緣を以て呑ン兵衛の息子となつて生れた以上には、矢張り呑ン兵衛の子として孝行を盡すと云ふことでなければならぬ、そこが緣であります。法華經の道德は無暗に物を新らしくするのではない、成るべく世間の事は穩かならんことを日蓮聖人は望んで居られる、それが法華經の圓會の思想であります。併し能く々々いけないものは直さなければならぬ。さうすると題目がどうなるかと言ふと、今日の教育勅語にお示しになつた所は、我國の緣に依つて發達して來たものであるから、日蓮主義は先づこの國體のこと、忠君愛國のこと、親孝行のこと、その他仁義禮智信と云ふやうな、さう云ふ事は皆日蓮聖人は尊重して居る。その點は日蓮聖人に於て皆事實上に現はれて居るので、決して法然や親鸞の云つたやうに、普通の道德は構はないと云ふやうな事は云はない、實際の社會に存して居る道德を尊重する教である。その本は非常に大きなものでありますけれども、先づ德目としてはさう云ふことである。

一八、法華經の德目

それで法華經の教の方から考へて見ましても、菩薩行と云ふ事が大切な問題になつて居りまするので、

經文にも、是の經は菩薩所行の處に住すと云つて居る。菩薩行の中心思想と云ふものはどう云ふのであるかと言ふと、大慈大悲の精神に感奮して、自らも慈悲を行はうとするのが菩薩の精神であります。その中から現れて來るものは、前に言ふ因緣に依つて發生して居るその國の道德を尊重して行く。それから衣座室の三軌と申して、如來の室に入り如來の衣を著如來の座に坐してこの法華經を修行せよと說いて居ります。この如來の衣とは柔和忍辱の心であつて、困難を忍び、作し難き事を作す、難忍を忍び難作を作す、そこに道德がある。如來の室と云ふのは一切衆生の中の慈悲心是れなりと云つて、我等の慈愛である。如來の座とは一切法空と云つて、公平無私の心である。因はれざる心、公明正大の心、それが即ち如來の座である。斯う云ふ三つが大切な事になつて居るのであります。尙ほその外に四つに結んで法華經の心を說いた時にも、諸佛に護念せらるゝ信仰と、德本を植ゆると云ふ一般の道德と、正定聚に入ると云ふ正義の團結、それから一切衆生を救ふの心と云ふのを擧げて居りまするが、斯う云ふものが德目上大事であります。宗教の信仰と、一般の道德と、正義の團結と、その根本に慈悲を持つと云ふやうなことに說かれて居ります。非常に是は良しいので、是は今日の道德上の研究よりも進んで居るのであります。さうしてこの德本に就ては報恩の道德となつて、父母の恩、國王の恩、衆生の恩、三寶の恩、この四恩の道德を實行する。その德目は非常に整つて居ると思ひますが、之を日蓮聖人の解釋に移して見れば一層日本的に色彩が鮮かになつて居りまするが、是は皆法華經に導かれたものであります。それを簡單に證明し得らるゝのは、日蓮聖人が一番最初に筆を執られた戒體義の中には殊にその點が正しく說かれて居る。この戒體義は聖人二十一歲の時の作であります。研究の出發點から道德上に深き注意を拂つて居ると云ふことを認めたな

らば、後々に至つてそれが完成して居ると云ふことは分る。途中から氣が付いてやつて居るのてはない、その點がはつきりして居るのてあります。

一切の戒を持つとも五戒無ければ諸戒具足すること無し、五戒を持てば諸戒を持たざれども諸戒を持つになり、諸戒を持つとも五戒を持たざれば諸戒も持たれず、故に五戒を具足根本業淸淨戒と云ふ、されば天台の釋に云く、五戒は既に是れ菩薩戒の根本なりと。（遺八）

斯う云ふことが書いてありますが、この五戒と云ふのは殺生してはならぬとか、盜みをしてはならぬと云ふやうなことて社會道德てある、儒敎て云へば仁義禮智信てある。一般社會の道德が本てあると云ふことを論じて居る。この五戒を忘れた時に於ては一切駄目だ、社會道德を忘れるやうな宗敎は駄目だと云ふことを最初から注意して進んて居るのてあります。戒體義の次に戒法門と云ふのがありますが、是はどちらも道德の研究てあつて、この戒法門の中にも斯う云ふ事が書いてある。

戒と申すは一切の經論に說るゝ數は、五戒八戒十戒十重禁戒四十八輕戒二百五十戒五百戒乃至八萬四千戒、如此の戒品多しといへども始の五戒を戒の本と申し候ぞ。（遺十六）

色々戒があるけれども、五戒が戒の本てある、殺生をしてはいかぬ、嘘を言つてはいかぬ、盜みをしてはいかぬと云ふ社會道德が一切の本てあると云つて居る。淨土宗などては信心だけて事が足りるやうに言つて居るのは間違つて居ると言ふことを非常に强く論じてあります。

淨土宗の學者傳敎大師の釋を引けども、末法には持戒の者なしと云ふ釋の意を知らずして人々を迷はす法門なり、悪るべし悪るべし。（遺二十三）

傳敎大師に末法無戒と云ふ言葉があるから、何をやつても構はぬと云つて悪いものを助けるやうなことを云ひ出した。それを日蓮聖人が攻擊して居る。淨土宗の人は傳敎の末法無戒の釋を引いて居るけれども、傳敎は世間の道德を持たなくても宜いと云つたのてはない、佛敎には非常に澤山の戒法があるが、さう云ふものに力を入れなくても、肝腎の五戒を持てば宜いと言つたので、末法無戒とは、親孝行は要らないと云ふことに法然が申したのは愚なことてある、さう云ふ誤つたことを云ふのは實に危險てあると云つて居る。是は日蓮聖人が未だ年の行かない二十二三歲の時のことて、その時からして着想をそこに置いて居る。注意して遺文を順序に研究して見ると、一貫して道德問題に重きを置いて居ることが分る。それが何處から導かれたのてあるかと言ふと、法華經の思想がさう云ふことになつて居るからてある。日蓮聖人が阿彌陀經、般若經を本にしたならば彼の如き心は出て來ないのてあります。

一九、法華經と德目の實行

尙ほ實行のことに就てでありますが、それは只今申した中に自らその敎が實行を促して居ることてありますから、日蓮聖人は直ぐ之を實行に移されて居るのてあります。さう云ふ風な意味も日蓮聖人の遺文に依つて見ますると、餘程鮮かになつて居ると思ひます。之も同じく戒法門に

法華經の開會の法門と申すは此五戒を開會するなり、經文委く見るべし云々、雞が子をはごくみ、鳥が子をかなしむまても皆五戒の謂なり。（遺二十六）

法華經の開會と云ふのは五戒、即ち世間の道德を發揮する意味てある、「雞が子を育くみ鳥が子を悲しむまても皆五戒の謂なり」と云ふこの言葉が私は非常に良いと思ふのてあります。鷄が自分の仔を育てゝ行く

親切を現して、あの鶏の持つて居る道德と雖も非常に尊いものであると云ふことを揭げて、人間は如何なる低級の者であつても、人に親切を盡し、親に孝行をすると云ふことは皆美しい道德である、それが尊いのだと云ふことを言ひ現されて居るのであります。この言葉を十分に味つて見たならば、この社會にある所の道德行爲が法華經の教に依つて力附けられて、花を開いて行くのであると云ふことを說いてある、この原則が明かになつて、それから一切の問題に及ぼして行く時に、それは鎌倉政府に對しては日蓮が勤王の大義を唱へたやうなものである。その時の必要に應じて意味が少しは變りますけれども、大體法華經の倫理の根據は只今申したやうな所に有る。さうして之を活動的の意味に見て行かなければならぬ。謂所「菩薩所行の處に住す」とありまして、その實行を失うた時最早法華經は無いのでありますこと故に、唯考へてお經を讀んで居るのみが修行てはない、この道德の精神を普及せしめて、自ら之を行ひ、人にも行はしめ、國家社會を道德的、理想的なる文明に造り上げることが法華經の實行であると信じます。

非常に廣い問題を持出しまして、十分に意味を盡すことの出來なかつたのを甚だ遺憾に思ひますが、荒ましの事は申し上げたと思ひます。今晩は是てこの講演を終ります。

教化　佛教と政道

本多日生

前回に第四節の所で伽毘羅衛の釋迦族の人達が釋尊に歸つて國王となり、そうして政治を取つて貰ひたいといふことを願つた時に、釋迦は「今正に是れ王の身なり」といふことを言つて居るので、決して今日の多くの人が考へるやうに世捨人となられたのでなくして、精神の方から國家を治め人文を開發するお考であつたと申述べて置きました。その本文をはつきり御紹介することが出來なかつたが、今夜はそれを初めに讀上げて置きたい、增一阿含經に

諸釋世尊に白して言さく、今日當に王と作つて此の國界を治領したまふべし、當に天下に於て轉輪聖王と作つて四天下を統べ千子具足したまへうしと。世尊告げて曰く、我れは今正に是れ王の身なり、名けて法王と曰ふ。

斯ういふ經文があるのであります。國に歸つて轉輪聖王になつて下さいと願つたけれども、釋尊は自分

は別に變つたことをして居るのではない、「我れは今正に是れ王の身なり」と言はれた、この法王といふは別段變つた意味ではない、轉輪聖王をも法行王と稱するので、正しき道を以て世を治めることを法王といふのである。羅馬法王とか又は日本で天皇が退位せられて法皇といふのとは意味が違ふ、精神的の方面からして人文の開發に貢献する所の王を法王といふのである。それは一切經に共通して居る言葉である。それからもう一つ大きく宇宙の眞理に基いて人々を導くといふやうな意味もあるのである。けれども世捨人だとか未來だけのことだとかいふやうな消極の意味は少しもない。法王といふ事は轉輪聖王と紙一枚の違ひしかない。それ故に「今正に是れ王の身なり」と答へられた、家に居ないからと言つても吾は王である。この意味を能く玩味して見れば釋尊と轉輪聖王の關係が明かであり、隨つて佛教と政道の關係が頗る密接なることも能く分るのである。

六。釋尊と政治の根本思想

今夕は釋尊と政治の根本思想に就て申述べたい、釋尊の政治に對する根本の觀念は、無論道德を本體として政治は行ふべしといふので、而もその道德なるものは茫漠たる觀念ではなくして、正しき因緣の教と申して居るのである、それは生命の無限を本として行爲に責任があるのみならず結果をも豫知するものである、この生命の無限と善惡因果の大規律を基礎に置いた道德でなければならぬ、他の道德は總て價値なきものであり、隨つて正因緣の道德觀念から起つた政治でなければ、善良なる國家を齎し得ない、理想の國家を發達することは出來ない、隨つて理想の文明を創造することも出來ない、故に釋迦が熱誠を籠めて說いた一代の佛教、それが眞の道德の教であり、政治の根本をなすものである、これを除外しては正しき道德もなく政治もないといふのが釋迦の

觀念であると信じます。佛教と道德をくつ附けて行くとか、政治にくつ附けるといふやうな、そんな薄弱な觀念ではない、天下の人類が總て正因緣に逆行した考を有つて居つても、それは誤りであると釋尊はお考へになつて居たと思ふのである。我が教を本にして道德があり、眞の國家があり、眞の文明がある、それを信ぜられたといふやうな言葉を以てしては長れ多い譯で、それを達觀してその明晰なる觀念の下に教を打立てられたものであると言つて宜からうと思ふ。他の一般の觀念が餘りに悉離れて居るから、斯樣に申すことが、珍らしい觀察のやうにも見えるけれども、珍らしい見方ではない、釋尊としては、それは當然のことと思つて居らるるであらう。曩に申した「我れは今正に是れ王の身なり」といふ意味から見て、斯く領解すべきである。現代人が餘りに宗教、道德、政治の關係を切離し過ぎて居るがこの分裂的思想は一大謬見と言はねばならぬ。大事な問題はその根抵に於て總て一に歸さなければならぬ。その一元より出でて働きの末に違ひがあつても、根本に於ては無論一である。國界主經の中に

若し諸の人王斷常の見に執し國政を理めしむとは、是の處り有ること無し、若し諸の人王明かに因果を信ぜば、國政乃ち理まるとは、斯れ是の處り有り。

と說かれて居ります。この經文は政治の根本思想を頗る明瞭に言ひ現はしたるものであると思ふ、國王が「斷常の二見に執する」といふのは、即ち曩に言うた正しき因緣の教を立てゝ政治を行はない。斷見といふは靈魂滅亡の思想を言ふのである、唯物的の思想の下に文明を造らんとするのである。常見といふは道德の觀念を無視して如何なることをしても人は幾度でも人に生れて來る、又地位の高き者は幾度生れても地位の高き者に生れるといふ風に考へて、永遠の生命は道德の規律に由つて向上向下する

ことを信じない、所謂唯物的な思想を本に置いて、權利だとか利益だとか物質的幸福ぐらゐを政治の目標にして、國の政を治めしめて、さうして善き結果が現はれるといふことは斷じてない、左樣な淺薄な思想の下に政治を執れば人々は墮落し、利害の衝突の爲に怨みを結び破壞が起つて、相互の幸福は全滅されてしまふものである。その場合に先づ因果を敎へて道德の大規律が永遠の生命に關係を持つて行くことを信ぜしめ、即ち現在のみが自己の全體ではない、永遠の生命の向上を加へて人々の行ひを支配するやうにするのが、明かに因果を信ずるといふのである、即ち釋迦の說きし敎が道德の根抵であり、その道德が政治の根抵であるといふ考に於て、國の政を執るならば、必ずや風俗は敦厚となり、國家は理想的に發達を遂げ、人文の上にも善き結果が現はれて來るものである。我が敎のこの因果の大敎義を無視しての道德及び政治は、決して好き結果は產まない。これが釋尊の政治に關する根本思想であると思ふ。現在の諸種の問題も本に戻せば、これが根抵であると思ふ。枝葉に就ての利害はそれは唯だ一時の問題であつて、少々づつの違ではあつても、根本が濁つてしまへば駄目なのである。源淸からずんば流れ必ず濁るのであつて、現代文明の思想の根抵が餘りに淺薄であり、薄つぺらな現實主義であり、自己中心の利害觀念を本にして政治を執る、それを人々が權利だとか、利益だとか、個人主義だとか、デモクラシイぢやとか言うて居るけれども、名前が變つて見た所が、思想の根據に生命の無限及び因果の大規律を忘れて居るが故に、その結果が洵に明白に現はれて、諸種の弊害となつて居るのである。そこで釋尊の理想から見た政治は轉輪聖王の德化がその標本であるので、この點を能く研究すれば自ら釋尊の政治の根本思想が明かになると思ふ。大小乘經中轉輪聖王に關する說明は、各所に出て居る、決して一部分の觀念ではないので、前同に申して置いた通り、釋迦の誕生より入滅に至るまでの全生涯を貫いて居る關係であつて、さうして釋迦の說敎の中にも阿含の初めから涅槃の終りまで到る所にその思想が現はれて居るのである。今その中の一二を紹介して他は省略する。增一阿含の中に

轉輪聖王は何なる法を以て化せん。父便ち答へて曰く、法を敬ひ、法を重んじ、法を念じ、法を養ひ、法を長じ、法を燻んにし、法を大にす、此の七法を行ぜば便ち應に聖王の治たるべし、以て寶を致すべし、復問ふて曰く、云何が法を敬ひ乃至法を大にするや。答へて曰く、當に學んで貧窮に給賜し、民に二親を孝養するを敎へ四時八節時を以て祭祀し、誨ふるに忍辱を以てし、婬嫉痴を除くべし、此の七法を行ずれば乃ち應に聖王の法たるべし。

これは簡潔に能く轉輪聖王の德化を說明されて居る。その主なる點は法を敬ひ、法を重んじ、法を念じ、法を養ふ等の七ッのことでありますが、非常に德化を重んじて、さうしてそれを生命として進んで行くのである。それが轉輪聖王の特色である。

そこでその法を敬ひ法を大にするといふのはどういふ事ですかと尋ねたに就て、法と云つても奇矯な文字や面倒な敎義ではないのである。貧困者を憐んで貧乏人を助ける方法を第一に立て、次に親孝行を敎へる事、それから宗敎の儀式祭典を重んぜしめ、人々に忍辱心を養ふて疳癪を起さぬやうにさせる、それから婬亂と嫉妬と愚痴とを除く、この七ッ、これを實行せしむることがそれが法を敬ひ法を重んずるといふ事なので、法とはさういふことを指して居るのである。要するに道德的政治を指すのであつて、現在は政治と道德とを二分して居るやうであるが、これが抑も社會が壞れて行く基になつて居ると思ふ。人々が道德の觀念を失つた時には、どのやうに

巧妙な法律を拵へても、何の役にも立つものでない。同じ阿含の中の中阿含經であります、そこに轉輪王經第六といふ標題がありまして、

子の剎利頂生王に告げて曰く、汝天輪寶を失ふを以て憂感を懷くこと莫れ、汝當に相繼の法を學ぶべし。

これは父の轉輪聖王が子の轉輪聖王に言うて聞かすのである。色々の寶はあるけれどもそれを失ふたからと云うて、何も心配することはない。さういふものはどうても宜い、けれども轉輪聖王の跡を繼ぐには、跡を繼ぐべき心得があり、その大切の事を忘れてはならぬ。それは何ものか、

何者か善法、何者か不善法なる、何者を罪と爲し何者を福と爲すや、何者を妙と爲し何者か妙に非ざるや、何者を黑と爲し、何者を白と爲すや、黑白の法は何れより生ずるや、何者か現世の義、何者か後世の義なるや、云何が作行せん。善を受けて惡を受けず、彼れに從つて聞き已つて行ずること所說の如くせよ、若し汝の國中に貧窮の者有らば、當に財物を出して以てこの子を給恤すべし、是を相繼の法と謂ふ。我れ今此の四天下を以て汝に付授す。汝當に如法に治むべし、化するに非法を以てすること莫れ、國中に諸の惡行、非梵行の人有らしむると無れと。

この相繼の法は道德の觀念を極力說明し、さうしてどういふ事が現世の義、どういふ事が後世の義といふ事にまで、說かれて居るので、現在の生活に就ての大切な點と、永遠の生命に對しての事柄と、この二面を國王たる者が考へて行かなければならぬ。さうして國中の貧困者を給恤することが最も大切な事である、この貧困者のことに關して非常に詳細に說明を與へて行くのである、それは人が貧困に陷れば惡として爲さゞるなし、どんな自暴自棄な精神にもなる、泥棒もする。人殺しもする、そこで轉輪聖王は左樣な犯罪者を見た時には可哀想に思うて、これを助ける、助けるといゝ氣になつて變らでも惡い事をする、惡い事をしても助けて呉れるといふ事になる、それでは困る、處罰するのも可哀想な事である、貧乏の爲めに泥棒をする、社會がさういふやうに貧困の爲めに惡化するから、所謂防貧的に政治を行はなければならぬ。貧困になつてしまつてからは施す途はない、貧困にならぬ方法を研究するのが轉輪聖王の第一の心得である。それには金持が自覺をしなければならぬ。そこで金をどう使ふべきかといふことを、よく國民に敎へて行く、それにはやはり現世の義、後世の義といふ、この宗敎の感化を施して行かなければ金持を敎化することも出來やしない、さうして從つて社會が罪惡の塊りになつてしまふ譯ぢやと、詳細に說明をされて居る。尙ほその金を儲ける事、及び使ふ事に就ての敎訓はよほど詳細を極めて居るものが他にある、その點は又後にお話をしますが、さういふ風にして轉輪聖王の德化といふは、決して空疏な宗敎を信心せよといふ、迷信を鼓吹するといふやうなことを言ふのではない、合理的なる生命の無限から立つて、さうして實際の給恤を盛んにし、世に貧困者なからしむるのを政治の本體にして居るのである。斯ういふことも今日の世の中に就ては、よほど能く分るのである。それから增一阿含の方には

轉輪聖王は法を以て治化し、終ひに殺生せず、復人を敎化して殺生せざらしむ、自ら盜竊せず、亦復他人をして偸盜せざらしむ、自ら淫泆ならず、復他人をして淫泆を行ぜざらしむ、自ら妄語せず、亦復人をして妄語せざらしむ、自ら兩舌して彼此を鬪亂せず、亦復他人をして兩舌ならざらしむ、自ら嫉妬患痴ならず、亦復他人をして此の法を習はざらしむ、自ら正見を行じ復他人をして邪見ならざらしむ、此の因緣を以

て、此の本末を以て轉輪せしむ、聖王は世人の應に供養すべき所なり。

これは主として五戒などの事でありますが、普通五戒などゝ云ふのは佛教が教へる。即ち宗教の中の教訓のやうに考へるが、五戒の如き道德的の事は轉輪聖王が行はねばならぬので、道德を盛んにし、宗教を盛んにすることは、國家がやらなければならぬのである。今日のやうに宗教を怖がるのは愚にも付かぬ事である、佛教はそんな怖い宗教ではない。釋迦牟尼佛の考から行けば、斯ういふ道德的の教化をするのは、それは轉輪聖王の第一の任務である。丁度日本の聖德太子が爲さつたやうな事が、それが國王の本分である。變つた人が出たのではない、若し他の人がそれだけしなければ、それだけ缺けて居るので、阿育大王が爲さつたのが、本當の王樣のやり方である。そこまで行かないのは俗氣紛々の國王であり、解脫しない國王である。國王ともなるべき者はもつと佛教的でなければならぬ、政治家も佛教的でなければならぬ。餘りに俗論が跋扈してしまつたからして、もう意味が分らなくなつた、宗教を信じないやうな者が、一國の政治を執るなどといふことは、あるべきことではない、一軒の主人でも宗教を信じないやうな主人は危ない、況んや一國を料理する宰相が宗教を信じないなどいふことでは、どうしても宰相の任務を果すことは出來ない、さういふ意味になる、能く考へたならば釋迦の理想はそこに在つたといふことを了解し得るであらう。

尙ほこれは大乘の方でありますが、法華部の大薩遮經に王論品といふのがあります、これは髮燧王と大薩遮との間の政治に關する問答でありまして、先づ大乘の中ではこれが最も政治に關しては詳細を極めて居るものである、王論品が三ッに分れて、一二三となつて居りますが、その一の所に於ては明かに政治全體の觀念を說いて居るのである。第二には刑罰問題を解釋し、第三には戰爭の問題を解釋して居るのである、この王論品が佛教と政道との關係を見るには、先づ有數なる經典であると思ふ、これは詳細に攻究する必要がありますが、併し今晩はさう詳しく申して居ることも出來ませぬから、要點を拔擢して御紹介する譯であります。

髮燧王が大薩遮に言ふには、あなたがお出で下さつたとは如何にも有難い、幸ひに自分が問いたいと思ふて居るのは、如何樣にして國王の心得が成立つものか、政治と云ふことは何う云ふ心得であるべきものか、お目に懸つて政治の根本思想を承ることが出來たならば、大海に行つて寶を得たやうなものであつて、これ程喜ばしい事はないと思ふといふことを言つた。その時に大薩遮は詳しくその事を說くのである。國王が貴いといふのも人民を守る力を持つて居るが故に貴といのである。大體王といふことは人民を愛護すること父母の如き精神を持つて居る故に王と名づける。「王の民を養ふは正に赤子の如くなるべし」、權力の關係ではなくして親愛なる親子の關係である、それ故に恰も赤子が湛れる蒲團に寢て居れば、親はその赤子の未だ泣かざるに先つて、乾ける蒲團に卷いてやるがやうに、民の疾苦を訴ふるに先つて、王は彼等に安慰を與へなければならぬ、「王者の立つことを得るは民を以つて國を成せばなり」、王は何故に國を維持し得るかといへば、人民を以て國を成して居るのである。その人民の心が安らかでなかつたならば、その國は危くなる、故に人心の安定を圖ることが國王の第一の任務である、その安定を圖るには常に赤子を思ふが如くに、心より離さずして、人民の疾苦を憂へてやらねばならぬ、そこで人民はどういふ事を苦しんで居るか、色々の事柄に依つて彼等は安定を缺くのであるからして、その事情の如何に拘らず總ての不安定なるものを除き去ることに努力するのが、それが國王の本分であ

り、從つて政治の本領である。出來るだけ人民を安慰し保護することの責任を果して、初めて王と名けられるもので、それを果さなければ王とは名けられないといふ。それから轉輪聖王の意味を解釋して、轉輪聖王は廣き範圍を統領するのであつて、小さな王樣が幾らあつても、それは決して侵略をしない、その大きな名を以てそれらのものを率ゐて行くのである、それが法王と云ふのである、道德の教化を布くので、國を侵略したり破壞したりするのではない、それ故に天下到る處、少しも反對もなければ惱みをも生ずることはないのである、又刀を用ゐることはない、轉輪聖王は威力を備へて居るけれども、それを用ゐることはしない。これに就て轉輪聖王の國家の事柄がよほど詳細に論じてある。その經文は皆偉大な教義であつて、苟しくも政治家はこの教義を服膺し、國王の名に依つて說かれては居るけれども、政治家といふものは轉輪聖王の部下として、その命の下に働くべきものである。その轉輪聖王が他の小さい國を安慰し廻つて居る場合に、斯ういふことを言つて居る、

汝諸王等、各々汝が國を安ぜよ、我が來るは汝が爲なり。

お前等の國を安んじて治めれば宜いのである。おれは侵略の爲に來たのではない、その時に小さな王がどういふ風にして治めて宜しいかと尋ねた、その時に轉輪聖王は、

法を以て國を治め、諸の衆生を護るべし。

道德に依つて政治を執り、そうして國民を保護してやれ、それだけのものである、極く簡潔明瞭に轉輪聖王は侵略を目的にしないことを說明して居るのである。尙ほ釋尊の政治觀念は平和を愛好するので、戰爭は絕對に否認はしないけれども、それは已むを得ざるに出づるのであつて、國と國との相交はるに就ては、互讓の精神を以て解決せよ、さうして平和を維持しなければならぬと痛論して居る。それは增一阿含經の中に、

古昔の諸王此の常法あり、此の諍國の法ありと雖も、猶ほ相堪忍して相傷害せず。

國家には爭が起ることは無いとは云へぬけれども、諍國の場合と雖も尙ほ相堪忍して相傷害せず、それは利害が衝突してもそこに互讓の精神を發揮し、所謂平和の觀念を以て互ひに傷害しないやうにして行かなければならぬ。それは古から王者たるものゝ定則であつて、何時もこれを守つて行くべきである。況んや佛教徒は爭鬪を否定する所のものであつて、戰なく爭あることなく、慈悲を以て一切を治めるのが、我教であると言はれて居る。これは多く說明を要せぬ事で、この明白な典據をお示しするのである。これは增一阿含の高幢品、それから邪集品といふのに、やはり戰を否否して居るのである。

各ゝ兵衆を興して共に相攻伐す、死する者計りなし、故に國土を流荒し、人民を逃散せしむ。

戰といふものは國を荒し人民に處を失はしめ、甚だ悲慘なことであるからして、さういふ事はやつてはならぬ。それは不法である、即ち善くない事であつて神は戰爭に組しないといふことを說き、平和を愛好するが無論政治の本領である。今頃平和會議が開かれるは文化の進をざりし證左である。古より王者はこれを常法とする、併ながら已むを得ずして戰ふべき場合がある、それは後に戰爭の事に關する教訓として申上げて見たいと思ふ。

それから社會の狀態に就ては四層の階級を排斥したので、これは餘りに典據が多過ぎて一々必要はないのですが、阿含の阿毗經、阿毗といふは婆羅門の名である、釋迦の教化を受けて佛教に歸した、その場合に詳しくこの四層の階級を否定して居る、これは婆羅門の方に印度の部族として四ッに分れて居つたので、一ッが婆羅門種、二は刹帝利種、三が吠舍種、

四が首陀羅、この四ッが非常に區別せられて居つた婆羅門の神が造る時分にその場所が違つて居るといふのである。婆羅門種は口から生れ、刹帝利は胸の所から生れ、それから吠舎は腰の所から生れ、首陀羅は足の裏から生れたといふ譯で、神樣が拵へる時分の位置が違つた、故に生れて後も非常に區別して居る、それを釋迦が極力排斥して、階級を打破する爲に首陀羅の家でも、吠舎の家でも、何處でも構はず、自分は刹帝利の伽毗羅國の王者でありながら、さういう貧民の家へ行つて托鉢をした、さうしてそれのみならず、これを改善する爲に努力された事は非常なものである。一度弟子になつたならば、もとはどういふ種族であつたといふ事を許さないので、皆同一釋種同一乳味といふて、同じ人格であり同じ價値であるといふ事を極力說いた。それから奴隷の賣買を排斥した、これも增一阿含の中に出て居るし、他の阿含部にも出て居る、須達長者などは每朝奴隷を解放する爲に、奴隷の市に行つて澤山の錢を出して居る、それから釋迦は奴隷を營業にする者は無論佛敎徒たる事を許さぬ、奴隷の營業者に交際する事も佛敎徒としては禁じて居る、非常に奴隷の賣買に反對された。印度の風習では人と奴隷とは違つて居る、奴隷に賣られる者は蟲けらのやうなものとして人格を認めて居らない。支那にもそんなものがまだ幾らか居るが、古い時代の事であるから印度邊りでは奴隷賣買が盛んに行はれた、釋尊は今言ふ通りその營業者に對しては、交際することも嚴禁して居つたのであります。てすから社會のさういふ理由なき階級觀念、壓迫といふやうな事を改善されたので、釋迦の敎の正しき因緣の思想が政治の根抵であり、社會のさういふ惡い制度を改善することも、これは印度では唯政治家としてては改善出來なかつた、それを釋迦が梵天の神の造物主と云ふことを否定して、根本から印度の風習を改善した。その偉大なる運動を能く理解しなければならぬ。

法華三聖に對する感想

文學博士　井上哲次郎

それを日本に於て組織した。組織しまして、十住心論など今日から見ると大したものてはないが、併ながら餘程注目すべきものであります、それから祕藏寶鑰、顯密二敎論、出世間即身成佛論、なかなか良く書いてあります、殊に『顯密二敎論』といふものは何を書いたか、勿論顯密二敎の區別を書いて居りますが、どういふ事であるか、これを簡單に能く分るやうにお話致しますと、顯敎と密敎とを二つ區別して、密敎は言ふまでもなく弘法の傳へて來た所の眞言宗、その眞言宗の妙てあります。眞言宗は即ち密敎てある、秘密の敎てある、天台法華宗は顯敎てある、顯はれたる宗派てある、顯敎といふものはもう弘法が支那から歸る時に密敎に對して降參したなどといふことを書いて居る位てありまして、顯敎といふものは世間に對して分るやうに說いた佛敎てある、通俗佛敎と斯う譯したら宜いてせう、天台宗などは通俗佛敎てある、俗佛敎てある、本當の佛敎の敎理を傳へたものてはない、方便に依つて世間の一般の人の分るやうに說いたものてあつて、密敎から言へば顯敎てある、眞の佛敎の敎理を傳へたものてはない、眞の佛敎の敎理は吾々密敎徒の間に、專門家の間に傳へ得るものて、是は世間の知り得られるものてはない、それだから秘密に吾々の間に傳はつて來て居るのが密敎てある、顯敎は通俗佛敎て、淺薄な敎てあり、本當の佛敎の趣意を說いて居るのてはない、世間に分るやうに方便を以て說く所の佛

教である。斯う說いた。大變弘法は文章が上手であります、中々文章が上手で、傳敎もこの點に於て一歩を讓らなければならぬ、兩方讀んで較べると分りますが、傳敎も上手でありますけれども、弘法は又一層上手、中々食へない人である、弘法は事務僧である、彫刻もやつたやうであります、字も中々上手、文は殊に上手で、『顯密二敎論』『秘藏寶鑰』『出世間即身成佛論』孰れも中々能く書いてある、實に巧妙な文字である。文章が良いから論旨は難しいけれども能く分る、その綺麗な文章を以て顯敎と密敎の差別を盛に鼓吹宣傳した。傳敎は弘法の密敎は小乘佛敎である、權大乘の佛敎である、實大乘ではない、眞の大乘敎ではない、斯う言つて大に貶して、今後の佛敎は大乘でなければならぬ、殊に法華經の如き眞の大乘佛敎でなければいけないと言つて、それで以て小乘佛敎が大分衰へて殆んど勝利を得て居る所に、横から弘法が、天台宗は通俗佛敎、淺薄な佛敎であるというて貶した。之には傳敎も困つて、遂に傳敎は奈良朝に於て斯うした爭ひの中に逝くなつてしまひました。その上何でも弘法は傳敎よりも長生をした、十七年でありましたか、ずつと長生をした、その間に盛に顯敎のことを攻擊した、傳敎は疾に死んでしまひましたからそんなことは知らない、中々弘法といふ人は迚も泊斷のならぬ人であると思ひます。併しさう又弘法を無茶に惡く言うてもなりませぬけれども、まあさういふ所がある、中々どうして弘法は餘り人と爭はないやうにして、さうして中々盛にやつて居る、是は打開け話て、本當かどうか知りませぬけれども、先づ飾りを取つて除けまして、赤裸々にお話し致しますとさういふ所が大變にある。

そこて斯ういふことをして居る弘法の側は後て偉い人は出ませぬ、中々弘法は餘程好く纏めましたが、後の人は弘法の書いた書物を註釋說明をするのを以て能事としました、高野山の側から弘法と肩を並べるやうな名僧は後から出ませぬ、誰も出ない。所が叡山は違ふ、叡山は傳敎の次に慈覺大師のやうな傳敎と肩を比するに足るだけの名僧が出た、大家が出て居る、義眞の門下からして智證大師のやうな人が出て居る、慈覺大師、智證大師、傳敎と肩を比べ得るだけの大家が續々出た、是は皆入唐して居ります、慈覺智證も入唐した、いろ〳〵澤山の書物を持つて歸る、さういふ人が出た、叡山と野山の歷史上の經過を辿つて見ると大變違ひがある。弘法は餘り立派な經典の如きものを拵へたから、註釋して之を傳へると云ふことが野山の方では必要であつた、叡山の方では傳敎が纏めて居らぬ、天台宗の經文は支那に於て智者大師が好く纏められた、天台の智者大師は華嚴の澄觀と對立して居ります、是は佛敎界の哲學者として巨頭と言はれる人で、二人が最も傑出して居ります、餘程能く纏めた。天台宗の敎義は智者大師の力を以てせざれば出來なかつた、傳敎は之を傳へましたけれども、天台だけには止めなかつた、傳敎のやつたことは包容的でありまして、天台宗の外に密敎も禪も神道も合せ統一しようとしたやうな所があります、けれども天台宗の敎理は新に組織する必要はなかつた。

そこて茲に妙なことが起りましたのは、弘法との關係で、弘法は中々さういふ當時の傑出した僧であります、今のやうな手段を執つた爲に、傳敎の後に出て來た人はどうしても密敎をやらなければならぬやうになつた。慈覺も智證も支那へ行つて主として密敎を習つた、天台宗や他のものも習ひましたけれども、密敎は主に習つた、密敎を第一とするやうになつて、慈覺も智證も、又後に出ました安然といふやうな、中々叡山系統の學者が密敎を習つた。さうして叡山側を台密となし、弘法の側の密敎を東密と申した、台密の方は大乘戒を主とする、東密の方は金剛戒を主とするといふ違ひはありますけれど

も、やはり孰れも密教には相違ない。叡山側は善無畏三藏系統の密教を傳へ、弘法の方は先刻申したやうに金剛智三藏系統、さういふ樣な違ひはありますけれども、どうしても密教を主としなければ世の中の受けが惡いといふことになつて、弘法に影響されて叡山も密教化してしまひました。折角傳教が天台法華宗を開いたにも拘はらず、あとはずつと慈覺、智證、安然、皆密教を學ぶことになつて、密教の大家が叡山の側に出來て來ました。それはどうも他にも理由があつたやうてありますけれども、大なる理由の一つは弘法の影響てあります、弘法が天台宗は顯教で、通俗佛教で、詰らないやうに言うたものだから、さういふ風になつたのてあります。

そこてどういふ結果になつたか。平安朝時代に於ては傳教と弘法が最も傑出したる二名僧てありますす、天台宗と眞言宗を開きましたのてありますが、それから段々平安朝が次第に下り坂となつて、行詰つて、鎌倉時代となりましたが、鎌倉時代となつて宗教界が一變しました。玆に時代が變つて、餘程簡單な宗教てなくては、もう難しいことては行かぬやうになつたのてあります。さういふ所からして法然の念佛宗などといふものが起りました、法然の門下からは親鸞が出ました、けれども親鸞の事は日蓮は一句も言つてないから、日蓮の時勢には親鸞といふ人は居なかつたと見える、法然の事は屢ゝ攻擊して居りますけれども、どうも親鸞は居なかつたものと見える。法念の念佛宗と言ふものは極めて簡單なものてありました、「南無阿彌陀佛」を言ひさへすれば成佛が出來るのてあります、あんなものを言ふのは啞か何かは言へませぬけれども、當り前の者なら誰ても言へる、此の「南無阿彌陀佛」を言ひさへすれば成佛が出來るといふ極めて簡單なことて成佛するやうに說いたものてあるから非常に流行つた。さうして中々「南無阿彌陀佛」の言ひやうが上手てあつた、私が言つたつて駄目てすけれども、當時の僧侶は皆人を催眠術に掛けるやうな工合に上手てあつた、是は實は秘密だけれども、女が惚れて仕方がなかつた、女官などが惚れまして仕樣がなかつた、それは法然はさういふことはなかつたけれども、淨土宗の後の方にはさういふことが中々あつた、大變「南無阿彌陀佛」の言ひやうをうまく言ふものてあるから、すつかり感じ入つてしまつて、信仰も何も滅茶苦茶になつてしまつた。尤も法然は柔和しい穩な人てあつて、さういふことはやらぬ、さういふ風て眞宗はひとりてに擴つて行つたやうな有樣てありました。所が日蓮といふ人が出ました、是は歷史て見ると鎌倉時代てありますが、此時にはまだ眞言宗の密教の影響が殘つて、而も叡山さへも密教かぶれになつて居つた。日蓮はやはり叡山に上つて學問をしました、當時の坊さんは大概叡山に行つたのてありますが、日蓮も叡山に上つて學問をしました。日蓮が叡山て主なる經文を研究して見ると經文といふものが大抵違ふ、色々な經文があるが、說いてあることが皆違ふ、そこてどの經文が本當に釋迦牟尼の眞意を傳へたものてあるか、之を確めたい、之を確めるにはどれに依つて宜いか分らぬ、どの宗派に依つて學問するのが宜いか分りませぬ。第一澤山經文があるが、どの經文が本當に佛陀の眞意を傳へて居るか、之を確めようとせられた。大に研究して最後に歸着したのが法華經てあります。どうしても法華經に釋迦如來の眞意を傳へてある、どうも是が一番佛教の眞意を傳へたものてあるといふことに歸着しました。そこて日蓮聖人の立場がはつきり分つた。分つてさうして周圍を見廻して見ると眞言宗といふものが蔓延つて居る、そこて日蓮は弘法を大敵として居る、「眞言亡國」と言つて大に反對した所以はそこにある。斯ういふ人を日蓮は皆「蟲」と言つて居る、眞宗の蟲とか何とか大抵蟲にしてしまつた。弘法も

慈覺も智證も皆蟲にしてしまつた、その位の事は日蓮聖人は何でもない、まだ酷いことも言つて居る。そこで眞言宗なるものは眞の佛教を傳へたものではない、法華經を主として居らぬ、眞言宗は法華經をバイブルとして居らぬから釋迦如來の教ではない。そこで密教に對して十分報服を闘りました、報服と言つても仇討といふ意味ではなかつたか知れませぬが、自らさうなつた。何故ならば傳教は天台宗は一番立派なものであると鼓吹して、さうして丁度聖德太子が法華經を第一の經典となされたやうに、傳教も、法華經をバイブルとして開いたのであつた、所が眞言宗が蔓つて法華經はどうなつたかといふと埋沒されてしまつた、それが日蓮の立場なのです。大に密教に對して反抗して、密教を貶して、之を倒さなければならぬ、即ち弘法の立場を粉碎して立つたのが日蓮の立場であります。

それを御話する前にもう一つ當時の背景を明かにして置かなければならぬ。何故ならば一方には法然の念佛宗が擴がつて來て居る、中々えらい勢ひて日蓮の氣に喰はぬものが擴がつて居る。それから傳教も禪宗を傳へましたけれども、それは附けたりであつて擴がりませぬ、禪宗が本當にえらい勢ひを以て蔓りましたのは、この間に支那からどん〳〵僧侶が歸化して來た、圓覺寺、建長寺などは歸化した坊主が建てたものである、さういふ風に支那から禪宗の學僧が續々來ました、又日本からも續々入唐しました、特に叡山系の人は悉く支那に這入つて居る、その他『日本高僧傳』といふものを見ますと――『群書類聚』に輯めてある『日本高僧傳』を見ますと、この支那に入つた僧侶の事が澤山ある、支那の僧侶も活潑に往來した、禪僧が續々這入つて來て非常に蔓つて來た。さうしてこの禪宗は鎌倉將軍、及び武士の精神及び生活に餘程適した所があつた爲に、忽ち是が鎌倉將軍の信ずる所となり、又大に武士の間に擴がりました、その事に就て詳しく御話する暇はないが、簡單に言へばさうである。又その他に日蓮の目から見て困るのは律宗が擴がつた、律宗では殊に鎌倉の極樂寺の良觀などといふものが非常に名望があつた。所が律宗といふものは奈良朝の小乘佛教の一派なので、律といふものは戒律を主として居るから大變えらさうに思ひますけれども、さうではなく、この律なるものは四分律と稱する小乘律を根據として成立して居る所の一派である。傳教も戒律を尊びましたけれども、小乘律ではない、梵網經を本位と致しました、大乘戒を行ふ考で、小乘律は取らない、日蓮も勿論小乘律を取る考ではない。その小乘律が鎌倉時代に勢力を得て居つた。

さうして法華經といふものは釋迦如來の說法を說いてある、釋迦如來の本意である、所が眞言宗は何をバイブルとして居るかといふと、大日經であり、どういふ佛を本尊として居るかといふと大日如來であります、所謂釋迦といふ眞個の如來ではない、そして法華經を本尊としては居らない。それでは念佛宗は何をバイブルとして居るかといふと阿彌陀經、三部經は皆阿彌陀經である、さうして尊ぶ所の佛は何かといふと無論阿彌陀如來であつて釋迦如來ではない。禪宗はどういふ宗教かといふと、教外別傳であります、以心傳心不立文字、佛經を罵る宗派であります、たゞ信仰を傳へさへすれば宜いので、經文を主とするものではない、一向さういふことは關係しない。尤も禪宗でも斯ういふ經文を尊ぶといふやうなことは、今日でも無論やつて居りますけれども、兎に角餘り經文には關はらぬ、不立文字と言ふ位、不立文字といふのは無論禪宗にも澤山文字はありますけれども、教の立て方が不立文字で、さうして釋迦如來を本位とする考ではない、別段さういふことは關はらぬ。それであるから日蓮から見ると皆

邪法であるといふことになつた、さうして法華經は蔵はれて居る。さうして玆に斯ういふことがある、法華經を最も大切な經文としましたのは、一體釋迦の出家及び成道に就ていろ〳〵な說があります、主なる說は二つあります、十九出家三十成道という說が一つ、二十九出家三十五成道といふ說が一つ、多くの學者は普通二十九出家三十五成道說を取りますけれども、十九出家三十成道說も經文に出て居ります、日蓮はこの十九出家三十成道說を取りました。さうすると釋迦は八十歲まで生きて居りましたからして、五十年間の說法、悟りを開いて後五十年間印度の中央部を巡りました、摩伽陀國、毘舍利國等を巡り、祇園精舍に行つて說法をしたのである、五十年間說法をした。併し五十年間の說法であるけれども、初めの四十餘年間といふものは佛法の眞髓を說かなかつた、日蓮は妙法華經を根據として言つて居る、無量義經には「四十餘年未顯眞實」とある、四十餘年未だ眞實を顯はさず、佛陀が本當の敎、この眞髓骨子の所は四十餘年間述べなかつた。何故述べなかつたかといふと、聽いて居る人が器でないから方便を以て說いた、相手次第に依つて說いたのであつて、この方便といふことは大變惡いやうに、後では嘘と同じやうに考へる人がありますけれども、今日方便といふことは已むを得ぬことになつて居ります、小學校讀本などは初めはやはり皆方便を以て說いて居る所があります、方便といふのはどうも已むを得ぬ、やはり佛陀も當時の時世に對して方便を用ひることは已むを得なかつたであらうと思はれる。佛陀は五十年間の中四十年以上敎の眞相を說かない、最後に至つて敎の正味の所を說いた、最後の八年間に說いた、最後の八年間に本當の敎を赤裸々に說いたのが即ち法華經として傳はつたのであります。玆に於てか奈良朝には華嚴經といふものがあります、華嚴經といふものはありましたけれども、華嚴經の大藏經典と雖も法華經に比べればやはり凡敎となる、法華經に比べればいろ〳〵な經文があつても悉く凡敎を說いたもので、法華經に於て本當の佛敎の眞意を傳へてある、玆に日蓮の立場がある。併しその立場は傳敎の立場で、日蓮は決して傳敎を惡くは言はない、傳敎を蟲と言つては大變なことであります、傳敎は日蓮の先驅者である、傳敎の先驅者は天台の智顗である、智者大師である、この智者大師は決して惡く言はない、皆同じ系統で、この思想の系統を忘れてはならない。この法華經なるものは佛敎の心髓骨子を傳へた所の唯一の經文であるといふのが日蓮の立場であります。この法華經が今蔵はれて居る、淨土宗が夢つて居りますから法華經を本流にして居らぬ、阿彌陀經のやうなものをバイブルとして居る。眞言宗、律宗、禪宗、皆大馱目である、皆僞せの佛敎であるといふので、大喝一聲大に破邪顯正して起つて來た所以はそこにある。そこの立場からして當時の佛敎界に對して攻擊の態度を取つて起りました。尤も今の法華經といふものはもとの法華經と大分違つて居る、あの中に後から加つた所が澤山あります、例へば『提婆達多品』などといふものは勿論後から加つた、又終ひの方の『囑累品』以下は皆後から法華經の中に加つたものである。今日から見ると、世間で法華經だと見て居る者と法華經の正味とは大分違ひますけれども、それにしても法華經は中々良い經文であるといふ事は疑はれない。

廣告

生徒募集

第一期生、第二期生若干名を募集す、志望者は本所宛履歷書、戸籍謄本、誓約書添附願出づべし。

千葉縣東金町

宗典講究所

史蹟

本化の慈光

笹川日堂

一

梅花數點、寒氣を堪へて香薫を送るの時、佐渡は未だに雪に閉されてをる。

人里離れた塚原の三昧堂、屋根漏るすき間より月は光をさす、壁落ち軒端傾くその中に去年の冬より、此處を寂光の淨土として、我即是父の懷かしい釋尊を安置し奉り、身は艱苦と戰ふて心は熱烈なる信念に活る、日蓮上人が行住坐臥法華經を修行せられて居る。

飢死すれば物怪の幸ひと、地頭を初め多くの敎敵が願ふ處である、「まだ日蓮は生きてをる、命冥加の奴じや」とは、話の口端に時々のぼる、喰はず嫌ひの敎敵は人知れず日蓮を殺さんとした、阿佛坊もその一人であつた、「日蓮の頭には大覺世尊代らせ給ふ」とは、上人の信念である、神は正直の頭に宿る、神は正直を栖とするとは、日本國民が傳統的至誠の發露である、阿佛坊は害心を藏めて上人にのぞんだが、理義明白なる慈訓に感激して熱心なる信徒となり、夫婦諸共陰かに供養を捧げた、死ぬと思ふた上人が近頃では往々これに傾く者のあるのを見た敎敵は、こは一大事と背議り信越地方よりも加勢の僧侶を得て、時は文永九年正月十六日、表面は問答に寄せてあはよくば上人を殺さんとの計畫を進めた、それが百獸の獅子に向ふが如く、上人のために說破せられて見苦しい敗北となつた。

この時より地頭の本間重連も上人の偉大なる人格と、其の根底ある主義に信伏し、その他の士女も一乘妙法の敎に心を寄せる者が續出した、上人が此の塚原に置き去り同樣に遇せられ、衣食は乏しく外には間に乘じて殺さんとする者がある、この場合に處する上人の用意と覺悟は、開目抄の著述によりて窺はれる。

「去年の十一月より考へたる開目抄と申す文二卷造りたり、頸切らるゝならば日蓮が不思議を留めんと思ひて勸へたり、此の文の心は日蓮によりて、日本國の有無はあるべし。」（種々御振舞抄）

日蓮法華經の故に度度流されずば、數數の二字を如何がせん、この二字は天台傳敎も未だ讀み給はず、況んや餘人をや、末法の始めのしるし、恐怖惡世中の金言の合ふ故に但日蓮一人之を讀めり。

當世法華の三類の强敵なくんば誰か佛說を信受せん、日蓮なくば誰をか法華經の行者として佛語をたすけん、乃至經文に我身符合せり御勘氣を蒙むれば、いよいよ悅びをますべし。

日蓮といひし者は去年九月十二日子丑の時に頸刎られぬ、此は魂魄佐渡の國に到りて、返年の二月雪中に記して有緣の弟子へおくれば、畏ろしくておそろしからず、見ん人如何に畏ぢぬらん、此は釋迦多寶十方の諸佛の、未來日本國當世を寫し給ふ明鏡なり、かたみとも見るべし。

雄大なる主義、剛健なる信念等は此の開目抄に表現されてをる。

二

天台の學僧最蓮坊は流謫の身となりて、永い間佐渡の島根に淋しい暗い生活を續けた。「俺は十七出家の後は、妻子を帶せず、魚鳥を喰はず、持律堅固に一心三觀に思を凝し、常行三昧の念佛にあこがれた」

永い月日の修行は恰も砂の上に樓閣を畫くような心地であるとて、光明と安慰を求むる道に悶へた最蓮坊は、塚原問答の結果心氣一轉し、上人の導きに感孚して、弟子の一分に加はり、名を日淨と改むることになつた。

文永九年の一月最蓮坊は塚原の三昧堂に、初めて上人に面謁を遂げ、一乘妙法の教を受けて、淋しい暗い生活より救はれたのである、天台の教は去年の曆で末法の時機に適はず、朝題目に夕念佛の評語は、その亂雜と教義の基礎薄弱を證するものである、本尊戒壇信行の確立したる超勝の教でなければ、世法即佛法の燈明は認められない、最蓮坊が永い間の修行が水泡に歸するは當然の岐路である。

最蓮坊は天台の學匠である、故に上人はこれが對應として、立正觀抄當體義抄等を送られ、本化別頭の教觀を示された、立正觀抄は天台の學僧が、天台の止觀は法華に勝るといふ謬見を匡正されてあるが、上人の尊意は源濁れば流清からず、萬卷の書を繙くも根底が濁れば得る處ないと同じく、根本の思想が謬亂すれば、方向定まらず、浪のまにまに流れて行くと同じく、人生は正義に立脚せなければならない、正義の觀念はすべての基本である、所謂立正觀は我等が向上達成の寶であることを訓戒せられたのである。また當體義抄は宇宙人生と宗教との關係を說き、安心の範を示された、則ち哲學的說明の權威で、一面には信仰安心の秘鍵である。

三

人生に於ける最要の意識は何んであるか、最蓮坊は此に着想して上人に「生死」の事を尋ねた、生死一大事の血脈はこれに對する上人の明答である。

「夫れ生死一大事の血脈とは妙法蓮華經是也、乃至、然者久遠實成の釋尊と、皆成佛道の法華經と、我等衆生と、三全く差別なし、妙法蓮華經と解りて唱へ奉る處を、生死一大事の血脈といふなり、乃至、總じて謂へば日蓮が弟子檀那等、自他彼此の心なく、水魚の思ひを成して、異體同心に南無妙法蓮華經と唱ふる處を、生死一大事の血脈とはいふなり、然も今日蓮が弘通する處の所詮是なり、若し然らば廣宣流布の大願も協ふべきものなりと。

夫れ金は大火に燒けず、大水に漂はず、朽ちず、鐵は水火共に堪へず、信仰の要旨は此にあり、五種の妙行中、唯讀誦の口業を簡びて、意業身業を等閑に附する者、難を忍び、廣宣流布の大願を果されようか、抽なき者の習ひとして眞の時に忘るゝ者は、人生最要の「生死」の意識がない故である。

四

最蓮坊が病氣に惱んだ時、上人は新禱經を授けられた、其の送狀に、

「日蓮も信じ始め候ひし日より、日毎に此等の勸文を誦し候ふて、佛天に新誓し候ふにより、種々の大難に遇ふと雖ども、法華經の功力、釋尊の金言深重なる故に、今まで相違なくて候なり、それに付けても法華經の行者は、信心に退轉なく身に詐親なく、一切法華經に其の身を任せて、金言の如く修行せば、慥かに後生は申すに及ばず、今生も息災延命にして妙法の大果報を得、廣宣流布の大願を成就すべき者なり、乃至、國中の謗法をせめて釋尊の化儀を資け奉るべし。

立正安國論には一身の安堵を思はば先づ四表の靜謐を祈るべし、早く天下の靜謐を思はば須からく國中の謗法を禁ずべしとある、一天四海皆歸妙法國家安泰萬民快樂廣宣流布は、日蓮の教義を奉ずる者の第一の志願である、されば上人が廣宣流布の大願を成就すべき者なりとの訓戒は、誠に大切なる教徒の心得である、新禱の極意は此の新禱經送狀に盡されてをる。

護應の本主釋尊を仰ぎ、最勝敎王の法華經を信じ、

自受法樂の境界を、上人は最遠坊に對し左の如く叙せられた。

「劫初より以來父母主君等の御勘氣を蒙り、遠國の島に流罪せられし人人、我等が如く悦び身に餘りたる者よもあらじ、されば我等が居住して一乘を修行せん處は、何れの處にても候へ常寂光の都たるべし、我等が弟子檀那とならん人は、一歩も行かずして天竺の靈鷲山を見、本有の寂光土へ晝夜に往復し給はん事、うれしさ申す計りなし。

嗚呼、本化の慈光は末法萬年の闇を照し、普ねく群類を救ひ、暗雲晴れて、天空の月は我等に無始色身常住の光に浴せしめた。

日蓮主義畸人傳

十一、大正の山法師

宣傳服に黒のヘルメット帽、珠勝氣な輪裂裝に破れ靴を穿いて、皇色化した白い頭巾をバンカラに結んだ格好は、どーしても大正中京の街頭に現はれた山法師である。

札幌長大出身の先覺で、乳牛界では相當の成功者であつたが、何を感じてか身を日蓮の流れに投じ、道名を常調と號す。「妻君はどうしました」「圓滿に分れました」、業務の爲には牛を殺した手に、今は珠數つまぐつて、勤勉の婦人に信仰を說く、不惑に近い年で小僧に交つて雜巾をつかむ、いくら働らいても疲れない、朝から晩まで、晩から朝まで、一日に六千枚の辻ビラを張つて、中京の街から街を赤化した、神祕の手が大名古屋市を撫でた樣な奮鬪をして置いて、翌朝はケロリと未明に起きて常德寺の境内を掃いて居る。畸人か偉人か、奇跡とも云ふべきは、奮鬪の後で時々君の姿が紛失する事である、多分居酒屋のチャブ臺の下、血の滴る樣な生肉を嚙りながら復宵道を說いて居る事であらう。

記事

中京思想界の關ケ原戰

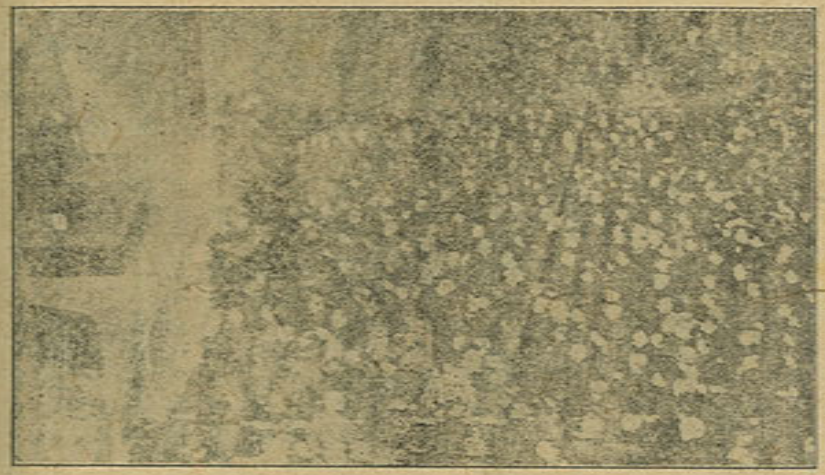
大日本救世團の關西宣傳隊が名古屋へ來た、內務大臣の添書を持つて知事を初め各方面の有力者を說いた、そして講演會の準備に關しては統一團支部に於て應援する事となつた。期間僅かに七日、宣傳委員の非常召集は行はれたり、骨も折れよ、身も碎けよ、日頃鍛へし双腕の太さ試しくれんと宣傳會議の夜は支部長以下婦人會員に至るまで決死の色に更け渡つた。人力を超へたる計畫は成つた、疲勞も物かは、奮鬪も物かは、一片信仰の赤誠によりて力附けられたる神祕の手は、朝より夕まで、夕より朝まで大名古屋市の辻より辻を縫うて、一晝夜にして六千の辻ビラは帖附された、統一團同人の信仰の血に依つて名古屋市は紅に染められたのである、更に十六萬の聽講券は花の如き少女の手から道行く人を信仰の覺醒に誘はんとした、自働車にメガホンを乘せたる日蓮主義バルチザンは、街を疾驅して雷霆の如く警告を叫んだ。斯くて大講演會の夜は來た、潮の如くに寄する群集は總て吾人の運動に贊意を表して居るのである、紙一重にして日蓮主義の信仰に來らねばならない、その數實に一萬有餘、されば念佛門徒の本據たりし尾張名古屋は遂に日蓮主義に征服されし事を吾人は滿天下の同士諸君に宣言し得る事となつた。左に新愛知新聞の記事を轉載して記念すべき大講演會の情況を紹介する事とする。

壹萬餘の聽衆魅し去らる

國技館で開かれた統一團後援の思想問題講演會

大日本救世團主催統一團後援の思想問題講演會は十六日午後六時から名古屋市東區南外堀町國技館で開催された。聽衆一萬に達し頗る盛會を極めた定刻

劈頭に活動寫眞を映寫種類は悉く皇族に關する物で新宿御苑内の風光「攝政宮淳宮高松宮澄宮四殿下の日光御用邸に於かせらるゝ御動靜」「攝宮殿下アルサスロートリンゲン戰跡御視察」聽衆自身脱帽を叫んで嚴肅崇高の中に拜觀した大澤市社會課長の紹介で大日本救世團理事陸軍少將野澤悌吾氏登壇「現代思潮の本流」と題し「現代思想の流れは數多、人生何れに歸趨を求むべきか迷はざるを得ぬ」と冒頭し「科學の態度は物の心奥を見ないが浮つ皮な現實の觀察ばかりてはいけないとて儒道を說き、佛教を說き、神ながらの道を說き結果人格の根抵、大我の域に進むべき事を力說して後人格の力て凡てを見て行くと佛の精神即ち一般平等の愛を生じ光榮ある世界を現實する事が出來る從來國家が惡政を布いた事に對する憤慨からそれを汚瀆しようとするが如き一派の思想は餘りに小さいものてある大きな眼光て現代社會を見てよろしく人格の力を發揮する事を忘れてはならぬそれは全人類に對する愛てなくてはならない」と、人格の力を極說し大喝采の中に降壇、次いて大僧正本多日生師「東洋文化の特色」と題して登壇「世人西洋文明を熱愛する餘り、西へ西へと心を惹かれる結果我が文明を忘れる形のあるのは甚だ嘆かはしい事てある」、として東洋文化の特色中



國技館に於ける思想問題講演會
（壇上に立てるは大日本救世團理事陸軍少將野澤悌吾氏）

佛教に云ふ「中道」を尊べ――物の中眞を執つて、右偏せず左偏せず、即ち左傾的運動左傾的思想を持つて行動思惟する者は東洋文化を破壞する者てあると述べ、暗に過激思想、社會主義及び勞働問題の偏したるを戒め「道」を尊べと敎へ此の講演中多く先帝陛下の遺訓等を取入れて聽衆に熱誠なる拍手を買うた、次ぎに大日本救世團長大迫尙道大將「興國と亡國の分岐點」と題して溫顏を壇上に見せ、句々人の肺腑に迫る有益なる講演の後同團理事本田仙太郎氏「信念」と題して、之れ亦熱辯を揮つて聽衆を盛んに感動させ斯くて十一時近く盛會裡に解散した。

各地の思想戰

京都活動史

一月八日本正寺に於て二樂會新年初會開催、「人と敎」金光會長、「國民思想と日蓮主義」萩原部長。△同月十日本正寺に於て本正婦人會新年初會開催、「婦人の自覺（其一）」金光山主。餘興、「日蓮上人御傳（統一節）」宇都宮弘道君。「君が代」舞、石上ゆう子。琴、石上あい子。「千鳥」琴、吉川君子。「狂言數番」清水氏外數名。謠引ありて盛會なりき。△同月十一日本山講堂に於て顯本健兒會新年初會を開催、君が代、宗歌、默禱、餘興、「江州音頭」林清一、山田篤三郎、土持副會長の童話、檜本櫻翠氏の薩摩琵琶ありたり。△同十三日本山大方丈に於て國光婦人會新年大會開催、來會者壹百七十餘名、例年の通り善哉の饗應あり。宇都宮氏の「日蓮上人御傳及び日蓮上人立正安國論獻上の芝居あり大當なりき、△同十五日感覺院に於て護正婦人會新年初會開催、「日本婦人の使命」有田宏道師△十六日法光院に於て妙光婦人會新年初會開催、「婦人の自覺（其二）」金光孝碩師、同日健兒會例會、小林啓善、山田篤三郎、竹見佐太郎、有田會長童話あり。△十七日正行院に於て正行婦人會新年初會開催、△十九日猪熊元晉顯寺米田善次郎氏宅に於て家庭法話、「思ひやりの結婚（其一）」金光孝碩師　△二十日健兒會例會此日の寒氣は近來に無き寒さにて雪さへ加はりレコード破りの寒さなりしも健兒等は七十餘名出席せり、林、小林、山田、土持各氏の熱烈なる童話ありたり。△二十一日本山大方丈に於て統一團及護正會聯合大新年講演會開催來會七拾餘名、「所感」土持同理事。「日蓮上人御傳（統一節）」宇都宮弘道氏。盛大裡に散會す。△二十二日本山講堂に於て監督布敎巡回講演。△二十三日寂光寺に於て、同午後七時より東洞院妙祐久遠寺に於て武田山根開師の巡回講演ありたり。△二十六日健兒會例會。小林啓善、檜本藤次郎、有田會長、金光顯周の講話あり。△二月一日本山に於て國禱會修行後講演「日蓮主義と國難」有田宏道師、△同本山講堂に於て健兒會例會、△二日護正會例會を本山書龍室に於て開く來會者百餘名、「涅槃經講讃」萩原本山部長、「日蓮上人御傳」宇都宮主計介君、△六日健兒會例會林玉光土持開氏出演、△八日妙滿寺成就院に於て護正婦人會例會、「眞の敎主とは」有田宏道師、△同日午後七時より川東本正寺に於て二樂會例會「日蓮主義者としての自覺」梅室榮太郎氏「日蓮主義の根本義」有田宏道師

△九日大慈院に於て法王婦人會春季大會開催、「信仰の本質」萩原本山部長。「日蓮上人御傳(統一節)」字都宮弘道君。△十一日本山に於て健兒會例會小林、有田兩氏出演。十三日本山に於て宗祖會修行後講演「大聖人の教義」萩原本山部長△十六日日蓮大聖人御降誕奉祝禮拜して健兒會の例會に移る小林啓善氏出演。△十九日本山講堂に於て管長祝下の講演、「觀書要文講義」本多日生祝下、本年度最初の公開熱列なる來聽者貳百餘名。△二十日午後七時より猪熊米四郎氏宅に於て家庭法話、「法華經の位置」上持良進師。△二十一日本山に於て健兒會例會。△十六日仁王門通り寂光寺に於て開山會修行後講演、「念力とは」上持良進師、△二十五日本山に於て開山會修行午後二時より本堂にて說教「御開山會報恩に就て」萩原日道師。△午後四時より法光院新住豐田道泰師入山式執行す。△廿六日京都法華會主催本山講堂に於て公開講演あり。「久遠偈讃講」田代師。「見佛未來記」萩原本山部長。

千葉縣

○市原郡内田村琴常高等小學校に於て三月三日午後一時より國民思想善導日蓮主義信仰鼓吹の大講演會を開催し、「開會之辭」鮎川校長。「時代思想と宗教の信仰」秋葉日敎師「宗教の力」栗原顯有師。「人生の第一義」監督布敎師關田僧正。△三月六日午後一時より長生郡二宮本郷村東鶴小學校で「開會の辭」高田日暢師。「宗教の價値」栗原顯有師。「日蓮主義と國民の自覺」監督布敎師關田僧正。△同日午後六時より同村岩出法泉寺にて婦人會の爲め講演開催。「開會之辭」藤平法順師、秋葉日敎師、栗原布敎師の前講について關田僧正の婦人修養訓あり。△七日午後一時より長柄村山模滿蔵寺にて「開會之辭」長岡育應師、「慈悲の聖訓」木村令快師。「現代思想と日蓮聖人」栗原布敎師、「日蓮主義の修養」關田監督布敎師、△八日午後一時茂原町蓮風小學校にて「開會の辭」小學校長。「君臣の大義」海老澤乾禪師。「實生活と信仰」栗原布敎師。「修養の根本義」關田監督布敎師。△九日豐田村大乘寺にて青年會の爲め關田僧正。△顯本法華宗第三敎區青年布敎團活躍。二月八日二宮本郷村山崎妙行寺に於て例會を開催、經書研究及信仰實感談を交し同月十四日茂原町市場に於て海老澤、竹内、宇津木、山本、木村、秋葉の各師熱列なる廣長舌を振ひ往來頻繁の老若男女は思はず日蓮主義の偉大なる感化に浴したるを歡賛しつゝ傾聽したるを見受けたり。△第三敎區青年布敎團狀況、三月の例會は監督布敎師の巡敎につき團員全部は敎區四ケ所の講演に必ず出席すべきの約を守り、八日を延期して監督布敎師一行を送りたる後の十二日を以て内長谷妙照寺に開催したり、之より先き九日茂原市場に於て道路布敎の實況を監督布敎師一行の視察を仰ぎたり、若來布敎團は大に發展の曙光を認めたり敎壇の爲め可悅。△山武郡豐成村前の内二月七日夜常覺寺に於て青年會例會「題目の意義」中島元道師。△八日夜常覺寺に於て題目講、「日蓮聖人傳」中島元道師。△十二日常覺寺に於て、「佛の敎」中島元道師。△十四日夜常覺寺に於て子安講、「安心とは何か」中島元道師。△十七日夜常覺寺に於て青年會、「華嚴經に就て」中島元道師。

金澤市

一月廿二日、本長寺、「成佛の理想」本郷常次郎。「法華大綱鈔の一節」窪田純榮。△廿八日本長寺に於て天晴會講演「法華小經」窪田純榮。「日蓮主義の信仰」小島由之助。「念佛無間論」石橋會率。△二月廿二日本長寺に於て、「信仰と實際」窪田純榮。「聖德太子十七憲法」本郷常次郎。△廿六日本長寺に於て天晴會例會講演、「法華經序說」窪田純榮。「日蓮主義者の覺悟」本郷常次郎。△金澤市に於て本化廣宣團設立されたり、左に團規を摘録す。第壹條　本團を本化廣宣團と稱す。第貳條　本團は純正日蓮主義の宣傳を目的とす。第叁條　本團は左の事業を行ふ、一、定期並に臨時講演、二、屋外傳道、三、訪問傳道、四、文書傳道(後略)

神戸市

はちす婦人會新年會を一月十五日午後五時半より統一團神戸支部に於て開く、修法、開會の辭、君が代合唱、法話、茶菓辨當の饗應、餘興、歌劇(舌切雀)(桃太郎)落語、琵琶、謠引の順序にて清き會は行はれたり、此日待ち兼ねたる新年會は朝來大雨にて停々止まず、出席者少かるべしと案じたれども、定刻に到りては立錐の餘地なき迄に多數參會者あり嚴かなる修法より漸次プログラムの順に進行し會員一同大滿足にて散會せり。△二月十五日午後七時より統一團神戸支部に於て、はちす婦人會主催大聖釋尊御入滅會及び高祖日蓮大聖人御降誕會を營修す、說敎「感話」渡邊義浩氏、「釋尊と高祖と吾々」の題下に熊井本光講話、餘興として筑前琵琶「伊東法穩」等終りて茶菓の饗應あり盛會裡に散會。△十七日三菱電機製作所職工約千名、講師本多大僧正講題、「國民の覺悟」△同日神戸製鋼所員「實生活と佛敎」祝下。△十八日三菱内燃機製作所職工千三百名、「國民の覺悟」祝下

大阪敎報

十五日堂陽寺にて聽衆三十五名、「解脫と解放と自由」京藤義應、「我に活くべき道あり」川崎布敎師。△二十日池田宅にて聽衆二十名。「我奉養世父」京藤義應。△二十二日堺妙滿寺にて聽衆六十名。「久遠の靈光」川崎本照。「日蓮主義より觀たる古き女と新しき女」京藤義應。「敎行證」上田布敎師。

備前和氣町

二月五日和氣町田中なか宅(正しき信仰)原田日男　二月十三日赤磐郡河田岡野万三郎宅(天台と日蓮)同十四日小瀬木佐々木紋平宅(大火所燒時)同十五日本成寺婦人會(婦人と信仰)同十六日同信會(七字の運用)同廿七日本成寺にて御開山會式(日什大正師敎訓)同廿八日天滿修養會公會堂にて、(開會之辭)藤原會長(健全なる思想)從野健藏(三種之御神器)原田日男。

伯耆

大正十一年十二月八日於松崎本立寺　聖上御懷平癒祈念法要並聖樂團一周年紀念講演會開催「聖樂の奉仕と日蓮主義」富田日造。「信は力なり」安達惠安。「至誠の力」石指惠鈴。△一月廿八日於本立寺町内小見の會合「正直なれ」富田日造△一月十一日於市橋宅にて講話、「法華の利益」瀧本慈納。「佛陀の敎訓其一」富田日造△二月十日於青谷町後藤長太郎宅幻燈講演聽衆百餘說明講師、中島孝治氏、富田日造師、△二月十六日於本立寺講話會、日蓮聖人の偉大と吾人の修養、富田日造。

津山敎報

日容上人法要、二月一日午前十時上の町弘通所に於て第一義院日容上人第三十三回忌法要を嚴修し終て左記人々の報恩謝德の講演があつた、「日容上人の德を慕ひて」林伊平。「聖語朗讀」山本駒一。「同」和氣善勝。「現代と日蓮主義」赤堀曉。「體道と用道」能仁一十。△青年團講演會十一日廣野村青年團の春季總會を開く能仁一十師は「世界の思潮と日本人の覺悟」と題して熱誠を振はる。△顯本婦人會十二日上の町弘通所に開催能仁一十師は「現代と婦人」と題して語らる。△修養會東苦田村に於て開催能仁一十師「信仰の力」と題する講演ありたり。△說敎會二十一日高野村に於て執行能

仁一十師の「統一的佛教觀」と題する講話ありたり。△知法護國道友倶樂部なる、津山教壇智識階級の正義の志士集ひ知法護國道友倶樂部なるものを組織し日蓮主義を中心として菩薩行を實行し以て國家社會の人心のために貢献せん覺悟を御佛に誓ひて發會式を擧行せり。△豐並村北部婦人會に於て能仁一十師を招し春季總會を開催せり。

遠三各地大講演　遠三各地に於る熱烈なる求道家の招聘により陸軍大將大迫尚道閣下は野澤少將と共に來演二月三日濱州盤田郡福岡村、夜御嶋村、四日晝豐濱村、夜上淺羽村。五日晝小笠郡青年聯合大會、夜久努村。六日晝羽柴妙遠寺夜演松市。七日晝三河蒲郡町小學生、同町在郷軍人青年、夜吉美妙立寺。八日晝同村小學生、新居町、夜二川町妙泉寺、九日晝二川在郷軍人青年團、白須賀町妙泰寺、夜細谷小學校。十日晝新城町、千郷村、夜豐橋市妙圓寺。尚九日より國友文學士及加藤少將參加御々唱せられ各地稀有の盛況にて大感動を與へたり。

統一閣法戰錄

△二月四日土曜講義午后七時、「無量義經講義」井村日成師。「開目抄講義」木村日保師。△五日日曜講演午后一時、「聖觀當年の大理想」安田台城師。「修養の第一義」井村日成師。「聖訓摘要」本多祝下。△十日地明會午后二時、「法華經要文講義」本多祝下。△十一日土曜講義、「開目抄講義」木村日保師。「無量義經講義」井村日成師。△十二日日曜講演、「統正の信仰」大森日榮師。「具足の道」木村日保師。「聖訓摘要」本多祝下、△十八日土曜講義、「開目抄」木村日保師。「無量義經」井村日成師。△十九日日曜講演、「宗教墮落せるか」古谷幹夫師。「日蓮上人新春の三大感歎」小西日尊師。「我れ日本の柱とならん」關田日城師。△廿五日土曜講義、「無量義經」井村日成師。△廿六日日曜講演、「滿、鮮、北支旅行所感」妹尾義郎君。「日蓮か弟子檀那」山根日東師。「聖訓摘要」本多祝下

巡回教化

二月二十五日午後七時大井町神龍館に於て開催

方　軌　　高木日靖師

色心二法　　荏川日堂師

二月二十六日午後一時品川警察署に於て警官夫人修養會

眞操論　　荏川日堂師

因に記す警官婦人修養會は各警察署中唯一の嚴しで恰かも板倉誇憲が駿府奉行を命ぜられた時其の妻と相談して受諾したると同じくすべての妻は夫君の職業に共鳴共助するの心掛おなければならない、私寺の奥樣達も自覺をして貰ひたいものです。

統一團青谷支部成る

鳥取縣因伯の國境青谷町に於て、今回熱烈なる同志により統一團青谷支部を組織せられ、三月十一日を以て發會式並に大講演會を擧行本部より國友社會部長出張、頗る盛會なりき、詳細は次號に。

廣告

妙滿寺の大法要

四月十一日十二日十三日の三日間
京都市總本山妙滿寺に於て

音樂大法會

法要　毎日（午前十時　午後一時）
說教　毎日（午前六時　午後三時）
講演　毎日午後七時

本多管長猊下御親修
全國布教師數十名出席
全國檀信徒にして參詣の方は四月八日までに本山事務所へ御通知相成度候

社告

時は來ました、日蓮主義勃興の時は來ました、そして日蓮主義によりて思想問題、社會問題、人生問題、婦人問題等は解決されねばならなくなりました。此時社會國家の諸般の施設は、日蓮主義に覺醒めた婦人の努力奮鬪に待つべきものが多々ある事と信じます、こゝに本誌は日蓮主義婦人團體の全國的統一と、その振興改善を企てたいと存じます、奮つて御賛成を希望します、そして左記の通信を御願ひします。

一、御關係の日蓮主義婦人團體の、會則、事業、成立後の略史、會員數、其他參考とすべき條項

一、日蓮主義婦人團體の統一及改善振興に關する意見（御通信中讀者諸君に參考となるべきものは本誌上に發表致します）

以上本年五月廿日迄に名古屋市中區新榮町統一編輯局宛御通信を乞ふ。

放開院寺

顯本法華宗社會部

東京市に來往する地方本宗檀信徒及び所緣者の爲に、實費宿泊所として左記東京寺院を開放す。實費宿泊料は一宿金壹圓五拾錢とす地方寺院住職の紹介を要す。

東京寺院

淺草區北清島町（停留場附近）	統一閣	同 谷中初音町	本授寺
同 吉野町（停留場裏通）	興常寺	本郷區駒込蓬莱町（肴町停留場）	顯本寺
同 （同）	常福寺	小石川區原町（指ケ谷町停留場）	本念寺
同 新谷町（十二階裏）	寄偵院	赤坂區一本木町（赤坂見附停留場）	右同所
同 南松山町（菊屋橋停留場）	法成寺	牛込區原町（柳町停留場）	常玄寺
同 永住町（北清島町停留場）	妙經寺	常榮寺	右同所
下谷區池ノ端七軒町	妙顯寺	同 早稻田南寺町（早稻田終點）	正法寺
		四谷區南寺町（鹽町停留場）	法恩寺

蓮華寺	五〇	市外巢鴨町染井	本榮寺
本敬寺		市外高田町雜司ヶ谷	右同所
寛受院		市外品川町南品川（青物横丁停留場）	妙國寺
乱了院		市外品川町（南馬場停留場側）	妙蓮寺
本光寺		右同所	本榮寺
清光院		右同所	妙經寺
善慶寺		市外入新井町（大森停車場約五丁池上道）	

放開院寺

顯本法華宗社會部

時代に鑑み左記方法に依り、日蓮主義者の爲に、名古屋市本宗寺院を開放す。

一、名古屋市に來往する人の爲に宿舍として常德寺靈山寺を提供す。

一、名古屋市に滯在する人の爲に宿泊所として法道寺を提供す。

右各項共に賄は自炊又は食堂に於て便ぜられたし

一、名古屋市に在學する學生の爲に常德寺法道寺内に監督常宿舍「護淵塾」を設置す。

在塾生は朝夕の勤經を怠らず及び日蓮主義宣傳に應分の任務に從ふ者とす。

一、講演會場として常德寺靈山寺妙行寺を開放す、

名古屋市寺院

中區新榮町四丁目	常德寺	同 區八百屋町三丁目	妙行寺
同 區古渡町五丁目	靈山寺	東區田代町	法道寺

廣告

本成寺建立募緣序

宗教の人生に必要なるは事理頗る明白にして誰か復疑を存せんや個人に就て之を見れば人格を向上し精神の不安を除去し以て苦と罪とを解脫せしむ又家庭に就て之を見れば家憲の中軸と成り祖先精靈の常在を信じ以て家庭の生命を尊重せしむ復社會に就て之を見れば信義の風敦厚の俗を維持し以て謙讓の美德を發達せしむ更に國家に就て之を見れば我が國體の尊嚴を信解し忠君愛國の道德を助長し以て犧牲の大精神を涵養せしむ加之宗教は各人生命の永存を敎へて不滅の信仰に立たしむるが故に一切の思想行爲の根本に光と力とを與へ愉悅の生活を拓開し來り縱し物質的には不遇薄命に坐することあるも精神界に國家を建設し所謂一歩を行かずして靈山に往復するを得ん斯くて數へ來らば宗教の効果は眞に廣大無邊なり然して各種宗教中最も完全にして且つ尊高なるは佛教に過ぎたるは無し其佛教中に於て最第一たるは實に法華經なり故に曾て聖德太子は

新寺建立淨財勸募

愛知縣北設樂郡上津具村本常寺

本常寺建設敷地圖

之を撰んで鎭護國家の妙典と稱し傳敎大師は之を以て南都六宗を統一し朝野の間法華經の尊信は遙に群典に超へたり日蓮大聖人出づるに及んで更に法華經の心髓を發揮し世界第一の妙宗を創立す之を顯本法華の大敎と稱す

茲に如上宗敎の必要を自覺し殊に顯本法華の大敎を尊信する士女胥謀り三河國北設樂郡上津具村の內淸淨の地域を撰んで一寺を建立し之を圓珠山本常寺と稱す此寺は顯本法華の大敎を宣布する道場なれば上は佛祖の常護を蒙むり下は遠近に法益を流布し由て以て廣大無邊の効果を奏せんこと疑なし予此

新寺建立淨財勸募
愛知縣北設樂郡上津具村本常寺

大僧正本多日生師講述

法華經要文講義

新寺建立淨財勸募

愛知縣北設樂郡上津具村本常寺

擧を聞き遙に之を慶讃し此の募緣序を贈り以て隨喜の意を表す希くは淸淨の士女益賛同の志を加へて速に所願を成就せんことを

大正十一年一月七日

顯本法華宗管長大僧正本多日生 印

淨財寄附申込者芳名

一金貳千圓也　顯本法華宗交附金
北設樂郡上津具村字行人原參拾八番の貳拾七
一畑四畝拾參歩　三浦麻次郎
同郡同村字木戸ヶ洞拾番ノ四
一畑貳反歩　村松運平
同郡同村字下今屋敷九番
一畑四畝拾歩　三城佐重
同郡同村字切畑九番ノ參拾貳
一山林貳反五畝歩　同人
同郡同村字箱淵壹番ノ四拾七
一山林七反歩　村松勝四郎
同郡同村字行人原八番
一田五畝歩　村松榮次郎
同郡同村字行人原拾四番ノ壹
一田九畝四歩　村松十七一
同郡名倉村大字東納庫字大野山貳番ノ參百七拾
一山林四反八畝貳拾歩　同人
一金貳百圓也　上津具村　村松みき
一欅參本　下津具村　佐々木豐平
一山林貳反八畝歩　同村　同人
一金壹百圓也　同村　同人
一金參百圓也　豐根村字下黑川　伊藤重太郎
大正十年十一月六日契約、大正十五年十二月迄年賦奉納　同村　鷲尾忠四郎
一金壹百圓也　豐根村字下黑川　寺澤米吉
大正十年十一月六日契約、大正十五年十二月迄年賦奉納
一金壹百圓也　上津具村　長谷川慶次郎
但固定資本
北設樂郡上津具村字本澤貳拾五
一山林參反七畝歩　今泉玉平
同郡同村字東山貳番ノ百參拾參
一山林壹畝貳拾歩　依田龜市
同郡同村字行人原參拾九番地ノ四
一山林壹反歩　村松榮次郎

混亂に陷るといふことは、古今免かれ難き通弊である。叡山がその失態に陷つたから日蓮がそれに鑑みて、非常に強くこの權實分判の方面を力説したので、日蓮の教化を排斥的に見る人もあるが、さうではない、日蓮の教は全く統一主義である、叡山の謬弊に鑑みて權實の分界を明かにする方に力を入れられたため折伏主義に見えるに外ならぬのであります、この事を覺るためにはこの説法品を熟讀すべきである。

五、諸の衆生の性欲不同なることを知り、性欲不同なれば種々に法を説きき。種々に法を説きしは方便力を以てす、四十餘年には未だ眞實を顯はさず、是の故に衆生の得道差別して疾く無上菩提を成ずることを得ず。

この文に於て更に權實の分界が明かに現はれたので、「諸の衆生の性欲不同なることを知り、性欲不同なれば種々に法を説きき。」その機根に依つて今迄樣々に法を説き來つたものである。その樣々に法を説いたのは方便力を以て説いたので、如來は眞實の知見と方便の知見とを有するが故に、その應用の側から種々樣々に法を説き分けたのであるが、振り返つて考へれば今迄説き去り説き來つた四十餘年の説法は、未だ眞實を顯はして居ない。だからそれ等の教に依つたのでは、大勢の人等はその得道が差別して、小さな物は得られるかも知らんけれども、究極の無上菩提には到達することが出來ない、一時の導きの爲に與へたものであるから、一分々々の效果はあらうけれども、佛教の究極の目的を成就することは出來ないから、その方便の教に甘んじてならぬと誡め

られたのである。この四十餘年未顯眞實の文に就て又樣々な惡口罵言する者がある、大乘は非佛說であるからこんな事を言つた所が當にならぬとか、或は法華經の味方をする者がこんな事を言つたのだとかいふて、この文に引つ掛つて他の宗旨の者が佛敎全體をまて惡口をいふ、禪宗は敎外別傳だから、方便でも眞實でも吾に於て何の關する所かあらんと言つたり、或は阿彌陀經は法華經と同時に說かれたもので四十餘年の中には入らんとか、ゴタ〳〵いふて居るけれども、それは皆遁辭である、遁辭はその窮する所を知ると言つて、彼等が基いたお經が方便のものであつたから、後からこの文に出會してマゴマゴして居るのである。大乘非佛說といふやうな事に依つて、この文を免れやうとするならば、楞伽經であらうが阿彌陀經であらうが、皆非佛說といふことになつて、己れの根據も失つてしまふ譯である。又法華經に味方をするから、その者が斯ういふお經を拵へたのだナンといふことをいふが、それは想像に過ぎないので、そんな事を立證すべき根據は無い、先づ大體東洋にありしこの佛敎の弱き方に就ては、無量義經が途中から出來た僞經であるといふやうな說は、未だ曾て無いのである。そうして天台大師も傳敎大師も聖德太子も皆之を認められて來て居る。又縱しこの無量義經だけは之を僞經として斥け得たとしても、法華經の中に入つてこれと對應する所の經文が澤山あつて、それはどうすることも出來ないのである、唯だ法華經の中の經文より一層明晰に玆に現はれて居るに過ぎないので、これと同じ義理は法華經の中にもあるし、又總べてお經を見る上に眞實と方便との分界を立てない限りには、佛敎は歸着

を失つてしまふ譯である。この文を僧むが爲に佛敎をして從ふ所を失はしめて見た所で、何にもならぬ。であるから、どうしてもこの文に觸れる所の宗派は、基礎が壞はれて行くのである、それは唯だこの言葉があるからといふのではなくして、內容に於て法華經に來らんければ眞實が顯はれて居ないのである、その顯はれて居ないといふことは佛身觀に於て第一顯はれて居ないし、人身觀に於ても徹底を缺いて居るし、宇宙觀に於ても無論本佛が判らぬやうては、眞の宇宙は判らぬのである。日本に皇室が存在して居つたか居なかつたかといふことが疑問とされるやうなことては、眞の日本が判らないであらう、それと同じ事である。それて何もこの文に依つてのみ他のお經が方便說だといふのではない、この文を創つてしまつてもお經の內容に入つて調べたならば、やはり眞實が顯はれて居ないのであるから、その顯はれて居ないことをこの經文に於て、はつきり言ひ現はしたに過ぎぬ、言ひ現はさないても眞實が顯はれて居ないのは言ふ迄もない、だからこの文のみを憎んても駄目である。唯だ應用する上に斯ういふ適切な文があれば、そのお經の內容に入つて細く調べないても、「四十餘年には眞實が顯はれて居ないと說かれて居るぢやないか」といふ簡單なことで領解が出來る譯である、內容に少しもさういふ事が無くして、唯だこの經文のみを振り廻はして居るのが日蓮主義ぢやといふやうな譯のものではない。近來もいろ〳〵の事を書いて居る書物を見たが、甚だ窮して居るやうに思ふ、古來之を「牛の鼻木法門」と言つたものである、大きな牛でも鼻木をかけると小さな子供に引き廻はされるやうなもので、他の宗派

の牛のやうな學者でも、法華行者が「四十餘年未顯眞實」の鼻木を持つて行くと、どうしても弱らざるを得ない。そこでいろ〳〵騒ぐ、それは牛は鼻木を嫌がるに相違ない、一旦鼻木をかけてしまへば小さい子供にも引き摺り廻はされるのである、鼻木をかけられたら堪らぬと思ふのである。これは日蓮聖人が建長五年四月二十八日清澄山頭持佛堂の南面に於て說法の時に、その點を力說されたのである、それ故にこの文は有つても無くても差支はないけれども、この經文を輕蔑したり、反對論者が嫌がるからと言つて之を除き去る事はいけないのである、これは日蓮主義者は能く記憶して置くが宜いと思ふ。

六、能く一音を以て普く衆聲に應じ、能く一身を以て百千萬億那由佗無量無數恒河沙の身を示す。

これは一切經の現れるのは皆釋迦一人の敎に他ならぬ、樣々の佛の相があり、各前があつても皆一つの佛の現はれてあるといふことを說かれたので、一切經に對する統一の理由と、一切の佛身に對する統一の意味を說く言葉として、後にこれが法華經の方便品に於ける敎法の開顯となり、壽量品に於ける佛身の開顯となつて來る素地であるから、この言葉は簡にして意味深遠なのである。能く一音を以て普く衆聲に應じて種々の法を說いたのであるが、それは釋迦一人の說に外ならぬ、能く一身を以て種々に身を示したのであるから、本に歸すれば釋迦一佛に外ならぬ。一切經廣しと雖も釋迦一人の說法である、種々の佛身なりと雖ももと本佛一身の現はれてあるといふ、この釋迦の口輪、身輪、さうしてこの聲と身の現れは釋迦の「每自作是念」の一念に歸着するのであつて、即ち意輪である、一切經は一音であり、種々の佛身は一身である、その聲に於て用き身に於て用く本は意から出るので、その意は本佛の大慈大悲大智慧の「每に自らこの念を作す」といふ釋尊の一念に歸着し、宇宙の救濟の大活動は本佛の「每自」の一念より發動するといふのである、所謂慈悲身口に薰じて種々の活動があると言つた言葉はそれである。これは文簡なれども意味深長で、法華經研究者は斯ういふ點をはつきり理解し意識しなければ、法華經の妙處を握ることは出來得ないのである。唯だ方便品の諸法實相の一理といふやうなことばかり言つて居つてはいかぬ、この一切經を一音に敎め、種々の佛身を一身に收め、さうして之を本佛の一念に歸着して、その一念に眞理を卷いて居り、智慧を有つて居り、一切を救濟する慈悲を有つて居る、その無限の力を本佛の精神的發動の所に仰へて信念を擧げて行くのが法華經の妙處、日蓮主義の極致であると信じます。

十功德品第三

これは無量義經を受持し修行するならば、十種の廣大なる功德があるといふことを說かれたので、その十種といふのは非常に廣いのでありますが、その中の二三を玆に摘出したのであります。

七、善男子、汝是の經は何れの所より來り、去つて何れの所にか至り、住つて何れの所にか住すると問はば、當に善く諦かに聽くべし、善男子、是の經は本と諸佛の室宅の中より來り、去つて一切衆生の發菩提心に至り、諸の

菩薩所行の處に住す。善男子、是の經は是の如く來り、是の如く去り、是の如く住したまへり、是の故に此の經は能く是の如き無量の功德、不思議の力有つて、衆をして疾く無上菩提を成ぜしむ。

「是の經」といふのは無量義經のことであるが、無量義經は往いては法華經の序であるから、無量義を收めれば一妙法である、收めた方から言へば妙法蓮華經である、說き分けた方から言へば無量義經である。「無量義は一法より生ず」といふ方から言へば、無量義經は妙法の中に入つてしまふ。だから無量義經に說いてある「是の經」は法華經の中に入るといふことは、無理に言ひ居る譯ではない。無學の徒は「何だか法華は都合の好いことばかり言つて、無量義經に是の經とあるのは法華經の事だといふ……」といふやうな事を素人がいふけれども、專門の研究に於ては決して無理な事をいふのではない、唯だその道程を細かく言はぬから、「是の經とあつてもこれは法華經のことです」といふ位のことで通つて行くのである。小僧の時分から長い時間をかけて順序よく研究すれば、皆吾々の言ふ事には秩序道程があるのであるけれども、さういふ事を一々今言うて居れば長くなるから略するのであるが、私共が責任を帶びて申す事は、言々みな根據のある事と御承知置きを願ひたい。これも文の面は無量義經に依つて說かれたが、之をもう一つ進んで言へば法華經の解釋と見て宜しいのである、即ち法華經は何處から來て何處に至つて何處に住るかといふ大切な事が說いてある譯である。

その場合にこの法華經は「諸佛の室宅の中より來り」とある、これは諸佛といふことも換言すれば本佛に歸着するのでありますから、壽量品から見れば本佛と見て宜しい、その本佛の現れから言へば諸佛である、一妙法の現れが無量義となるけれども、「無量義を攝して妙法といふ、諸佛を攝して本佛といふ」といふことは極りきつたことであるから、そこで經の文面は諸佛であるが、之を開顯の眼より見て解釋すれば「本佛の室宅」である、室宅とは慈悲を室となすとあるから、前に申した本佛の「每自作是念」といふ慈悲の御心の中から「是の經」は出て來る譯である。故に法華經が有難いといつても、その有難い本に戻せば佛の大慈悲を渴仰しなければならぬ。『本尊鈔』にも「佛大慈悲を起して妙法五字の袋の中に云々」といふ順序に說かれるのである。今の習ひ損ひの日蓮主義者のやうに本佛を除外して置いて法華經の有難さを說いたり、日蓮の有難さを說いたりするといふことは、經文の說明式には無い、法華經が出て來るのでも「是の經は本佛の慈悲の中から來る」といふのである。さうしてそれが「一切衆生の發菩提心に至り」といふのでは、この法華經の教が何處に引つつくかと言へば衆生の佛性開發の菩提心の所に行くのである。さうして何處に住るかと言へば「諸の菩薩所行の處に住す」で、その菩薩行を實行しつゝある所に是の經は住つて居るものである。お經は机の上にあるといふやうなことは素人の考である、字がお經である譯ではない、その中の活き〳〵したる教が即ち佛の慈悲の中から出て、菩提心に引つついて菩薩行の所に活躍して居るのである

る。斯ういふ風に「是の經の來至住」を心得なければならぬ。さうすれば其處に樣々なる功德、不思議の力があつて、一切衆生悉く無上菩提が成就し得られる次第である。だから佛の慈悲を渴仰する事と、自分の發心の定る事と、菩薩行を實行する事とが大切な點になるのて、その事を敎へて居るのが法華經である、それを導くのが日蓮である。その本佛の慈悲に感激せず、菩提心も奮ひ起さず、菩薩行をも實行せずして、唯だ日蓮を讃仰し法華經を崇拜して見た所が、その實質を失つてしまふ譯だらうと思ふ。その事は玆に於て說かれるばかりでなく、それが法華經の全部を貫く大精神なるが故に、法華經の終りの勸發品に至つても「是の經はどうしたら得られるか」といふ時に、「諸佛に護念せられ」とあるのて、その諸佛といふのも顯本すれば本佛てある、本佛に護られて居るといふ所の感激の精神が、この法華經を得る所の第一要素てある。

八、善男子、第一に是の經は能く菩薩の未だ發心せざる者をして菩提心を起さしめ、慈心なき者には慈心を起さしめ、殺戮を好む者には大悲の心を起さしめ、嫉妬を生ずる者には隨喜の心を起さしめ、愛著ある者には能捨の心を起さしめ、諸の慳貪の者には布施の心を起さしめ、憍慢多き者には持戒の心を起さしめ、瞋恚盛んなる者には忍辱の心を起さしめ、懈怠を生ずる者には精進の心を起さしめ、諸の散亂の者には禪定の心を起さしめ、愚癡多き者には智慧の心を起さしめ、未だ彼を度する者には彼を度する心を起さしめ、十惡を行ずる者には十善の心を起さしめ、有爲を樂ふ者には無爲の心を志さしめ、退心ある者には不退の心を作さしめ、有漏を爲す者には無漏の心を起さしめ、煩惱多き者には除滅の心を起さしむ。善男子、是を是の經の第一の功德不思議の力と名く。

これは十功德の中の第一の功德を擧げたのてあるが、その一つだけてもこんなに內容が豐富てある。未だ發心しない者が發心することを得る、慈みの心は禪定の心を起さしめ、愚癡多き者には智慧の心を起さしめ、未だ彼を度する心を起さしめ、十惡を行ずる者には十善の心を起さしめ、有爲を樂ふ者には無爲の心を志さしめ、退心ある者には不退の心を作さしめ、有漏を爲す者には無漏の心を起さしめ、煩惱多き者には除滅の心を起さしむ。善男子、是を是の經の第一の功德不思議の力と名く。

無き者がその心を起す、殺戮なる者が慈悲の心を起す、嫉妬む者が隨喜の心を起す、愛著の者は斷ち切る心が起る、貪る者は施しの心が起り、慢心の者には戒を持つ心が起る、瞋恚の盛んなる者には忍辱の心が起るといふやうな、ズッと玆に說いてある通りの功德がある。このいろ〳〵の功德は、大體は發心といふ事と四無量心と六度とが說いてあるのて、最初の發心しない者に菩提心を起さしむるといふのが發心て、それから慈、悲、喜、捨といふ四無量心と、布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧といふ六波羅密を擧げられ、それから尙ほ十善等の事が說いてあるのてあります。斯樣な四無量心といひ、六波羅密の菩薩行といふやうな、道德的なる人格が現はれて來る、この人格を改善する力が是の經の第一の功德てある、唯だ病氣が癒るとか、死んてから救はれる

といふことだけではない、無論さういふ神秘的の利益もあるけれども、第一の功德といふは、如何なる人格の劣れる者でも、人格が改善せられ、嫉妬多き者が隨喜の人となり、慢多き者が持戒の人となり、懈怠の者は精進の人となるといふやうな人格を向上せしむる力が、この法華經の有難い所以であると說かれて居るのである。

九、善男子、第三に是の經の不可思議の功德力とは、若し衆生有つて、是の經を聞くことを得て、若は一轉、若は一偈、乃至一句もせば、百千萬億の義に通達し已つて、煩惱有りと雖も煩惱無きが如く、生死に出入すとも怖畏の想無けん、諸の衆生に於て憐愍の心を生じ、一切の法に於て勇健の想を得ん。

これは十功德の中の第二を略して第三を摘出したのて、その第三としてこのお經には非常に功德力があるが故に、このお經をちよつと聽いて少しばかりても讀み、或はその義に通達するならば、煩惱ありと雖も無きが如くてあつて、煩惱を打ち切るといふことは要らぬが、煩惱は有つて居るけれどもその煩惱の爲に累せられない。さうして生死の巷に入つても、或は病氣の爲に死ななければならぬといふことになつても、或は刃の下に坐しても畏れを懷かない、それは人生の終りが來ても、不滅の生命に生きたる自分は、この人生だけが全體てはない、肉身の續く限りは人生に働くけれども、人生の終りに於ては更に新しき光を認めて進むものてある、それは如何に嘆いても悲んても生死は人生の定りてあつて、それをグズ〳〵考へるのは愚癡てある、自分の本體は不滅のものてあるから、いま死が刹那に迫つても「これて人生の終りに達せしか」と安んじて行くことが出來る、それ故怖畏を懷かぬことになる。さうして自分にさういふ安立を得て居る時、大勢の者を愍んて救ふ所の心が起る、一切の事柄に於て何時も勇氣を失はぬやうに健鬪の精神を持つことが出來る、さういふ立派な人格者となることがこの經の第三の功德の力てあるといふのて、これもやはり人格の上の利益が說かれて居る。

一〇、若し善男子善女人、若は佛の在世、若は滅度の後に、人有つて能く是の經典を得たらん者は、敬信すること佛身を視たてまつるが如く等しく異なること無からしめ、是の經を愛樂し、受持し、讀誦し、書寫し、頂戴し、法の如く奉行し、戒忍を堅固にし、兼て檀度を行じ、深く慈悲を發して此の無上大乘無量義經を以て廣く人の爲に說かん、若し人先より來た都て罪福有ることを信ぜざる者には是の經を以て之を示して、種々の方便を設け、强いて化して信ぜしめん、經の威力を以ての故に其の人信心を發し、歎然として回することを得ん、信心既に發して勇猛精進するが故に、能く是の經の威德勢力を得て得道得果せん。

これもやはり「是の經の功德力」を說いて居るのであつて、佛の在世でも滅後でもこのお經を得て敬ひ信ずること佛樣を視るが如くにするならば――斯ういふことは佛樣を輕んずるやうな人から見たならば意義を爲さんことであるけれども、佛敎信者は無論佛を敬ふのは定まれることであるが故に、經文を信ずること佛を視たてまつるが如く、それと違はぬやうにせよと言はれたので、今頃の佛敎徒のやうに、釋尊を敬ふのか敬はぬのかを問題にするやうなことは、愚も亦甚しき次第である。左樣な者が日蓮主義者などと名乘ることは、實に以ての外の事である、吾輩の權力の及ぶ範圍に於ては、左樣な者は一日も僧侶として置かない積りであるけれども、他の敎團は亂れに紊れてしまつて居るのであるから、何を言ひ居るのか判らぬ。

佛を敬ふやうにこのお經を大切にして、之を修行し、その敎を守つて行き、又深く慈悲を發してこの經を廣く人の爲に說いて行くならば――これは皆前にあつた所の人格の現れを言うたものであつて、無量義經に依つて人を導くと、その自分の敎化する對手方に現はれて來る所の變化を說いたのである。自分に十分の熱心があつてこのお經に依つて人を敎化しようと思へば、如何なる無宗敎者でも靈魂滅亡論者でも敎化されるといふことが說いてあるのである、その對手が「都て罪福あることを信ぜず」て、惡い事をしたからといつてその罪の報ひがあるといふやうな事は、少しも信じないといふ無宗敎的の人でも、このお經に依つて導いて、種々の方便を設けて敎化をして、「マア〳〵さう言はずに信じて見よ」と言つて、次第にこの敎に導くならば、お經に威力があるが故にその人に信心が發つて來、さうして何時とはなしに欵然として「成る程自分の考へが惡かつた、吾が生命は無限に存續するものである、罪と德とは永遠に己れに關係を有つ」といふことを信ずるに至るものである。「欵然として回する」といふのは、唯物的の觀念が無くなつて宗敎的の信仰に入るといふことで、さういふ邪念が回轉して善心に立歸り、無信仰が信仰にかへるといふことをいふのである。信心が既に發すれば思うたよりも、その人間が確かりやり出すやうになつて、遂にその者が得道を來たす、それは皆この經の威力である。所が阿彌陀經や地藏經に依つて居ると、今迄は人心を導き得たけれども、時代の進化と共にその敎の威力を失つてしまふ、西洋のバイブルでもさうである。所が法華經はお經の方が完全であるから、說く人の力よりも經典の威力に依つて信者がドン〳〵出來て行く。今日の日蓮主義の敎化などは皆この式であつて、法華經と日蓮の遺文が立派であるから、敎へる人の力は僅かであるけれども、そこに基かせさへしたならば、欵然として回することを得て、思うたよりも勇猛精進する人が出來る譯である。さうして前にいふ通りこれは無量義經に就いて言うてあるけれども、進んで言へば法華經に基けば尙ほ更その効果は大なる譯である。宗敎宗派に於てはその據る所の經典の如何が最も大切な問題である、それを今の佛敎各宗に於て說明しなくなつたのは、最早や暗に己れの依經が薄弱であることを認識して居るものであらう、法華宗だけはその根據としての依經を論明し、法華經ならざるべからずと力說して居るが、その據る所の經典が薄弱であつたならば、說く人のやり方が如何に善くとも、

結局はその基く所の經典に歸るが故に、駄目になつてしまふのである。今日蓮門下の人達は割合に人物は居ないのであるけれども、法華經と日蓮の遺文が立派であるから、粗末な人間でも多少の効果を現はして居るので、これは實に法華經と聖人の遺訓の偉大なるに感激しなければならぬと思ふ。

一一、能く一切衆生をして凡夫地に於て諸の菩薩の無量の道芽を生起せしめ、功德の樹をして欝茂扶蔬增長せしめたまふ、是の故に此の經を不可思議の功德力と號く。

これは總べて無量義經なり法華經の思想は、無闇に高い方から行くのではない、淨土門が法華經を攻擊するやうに難行だとか菩薩の道だとかいつて、それ程怖がらすべき教ではない、一切衆生が凡夫の地に於てその儘菩薩の無量の道芽を發せしむることが出來るので、人各々凡夫の儘でその中に菩薩の芽が生いて來る、「宮づかへを法華經と思し召せ」或は「女房と酒うち飲んで南無妙法蓮華經」と日蓮の言ひしが如くに、世俗と隔け離れずして、而も菩薩行の芽を生かしむるといふ所に尊さがある。所謂泥き嶺に蓮が咲くのではなくして、池の泥の中に蓮の華が咲くが如く、凡夫の生活の中に華を咲かせやうとして居る教である、凡夫地に於て菩薩の道芽を生起せしむるといふこの經文は、法華經の精神を說き得て洵に鮮かなものである。さうしてその芽が段々育つて功德の穗が欝茂扶蔬增長して、その人々の力量の耐え得る限に於ては、道德の樹を榮えさせて行く、斯樣になし得る教であるが故に、この經には不思議の功德力があると號けるのである。

今玆に擧げたのは十功德の中の一部分を摘出したので、經文には十功德が整然として說かれて居る、それは必要が無いとして摘出しないのではない、成るべく簡略にその要を得たいといふ所から、大事な經文も略してある譯であるから、詳しく見やうと思ふ人は、經の本文に就て研究されゝば、無量義經の如きは短かい一卷の御經で、全文を通讀すると言つても、大した事ではない、その結構なお經を大要のみ講ずるのは間違つて居るかも知れぬ、けれどもこういふ方法に依らなければならぬ時代であるが故に、簡略に一部分を拔いた譯である。斯樣な事が善いか惡いか、後世から觀ては判らぬことであらうけれども、自分はこの經の或る一點にても觸れしめたら宜からうと思ふが爲に、斯の如き方法を試むるのであります。

妙法蓮華經

これから法華經の本文に入つて講述をするのでありますが、前の無量義經が法華經の序文となつて居るといふことの證據は　次に摘出する序品の一、二の符號の下の經文と對參して考へる時に、確かに無量義經を說いて續いて法華經を說かれたことが判るので、無量義經といふお經は法華經と大切な關係があることを證據立てるのに、洵に確かな經文であらうと思ふ。無量義經は前に申した通りに、佛教の方便、眞實の分界を極めて明白に示して居るので、四十餘年には未だ眞實を顯はさずと說かれて、法華經の以前に說さし種々のお經は佛の眞實を顯はして居ないことが極めて明白になつて居る、その無量義經

が法華經の始めに附いて居ることは、法華經の眞實を證明するのに確實なる保證と相成るので、昔から丁度王の前に立つ將軍の如きものであると言はれて居る。無量義經に據つて方便眞實の分界を明かにして、さうして法華經に來つて眞實を顯はすといふことに相成るのであるから、そこで法華經に反對をする人達は、無量義經を嫌がること夥しいので、どうしてもこの無量義經が法華經の始めに續いてあるといふことに就いては、殆んど反對する餘地が無い位明白なことになるものであるから、何とかして無量義經と法華經を切り離さうと種々の工夫をしたけれども、どうしてもさう出來ないといふものは、唯今申す序品の一、二の符號の下の經文が、明かに無量義經を說き終つて無量義處三昧に入つて、さうして光を放ち、その光を放つて居る中に文殊、彌勒の問答があつて、それから法華經が說かれて來るのであるから、無量義經を說き終つて無量義處三昧に入つた、そこから法華經に移つたといふことが、頗る明瞭な關係になつて居るのである。

序品第一

序品といふのは、「序」は發端といふ義理であつて、由序ともいふ、由といふのはそれが本になつて次第に說を進めて行く、順序次第といふやうな意味である、順序といふのは一二三といふ風に物が段々に說かれて來る、序品は第一であるから、第一から第二、それから第三と進んで行く樣に、「序は由序の義である」といふのが先づ最も適當した意味であらうと思ふ。又序は內外を別つといつて、丁度家に於ては門のやうなもので、これからが內である、その前は外

本多日生猊下著書一覽

○法華經の心髓　金壹圓六拾錢
○日蓮主義初步　金七拾錢
○日蓮主義　金壹圓五拾錢
○修養と日蓮主義　金壹圓五拾錢
○國民道德と日蓮主義　金壹圓五拾錢
○日蓮聖人正傳　金貳圓貳拾錢
○日蓮主義綱要　金貳圓貳拾錢
○日蓮聖人の感激　金貳圓貳拾錢
○日蓮主義の運用　金貳圓五拾錢
○東洋文明の權威　金貳圓貳拾錢
○國民教化　金貳圓貳拾錢
○法華經　金貳圓貳拾錢
○戰士の伴侶　金貳圓貳拾錢
○思想問題の歸結と法華經　金貳圓貳拾錢
○聖訓要義　各叢書部金貳圓貳拾錢
○開目抄詳解　上卷一部金貳圓八拾錢
○聖語錄　金貳圓八拾錢
○優婆塞戒經通解　金八拾五錢
○大乘本生心地觀經通解　金八拾五錢
以上各送料一部金八錢
○法華經講義　上卷下卷各一部金叁圓四拾錢　送料一部金拾八錢
○大藏經要義　一部金叁圓八拾錢十一卷近既刊　送料一部金十八錢　年前金送料不要
○法華經要文　並製金叁拾錢　上製金五拾錢　送料一部金貳錢
○佛教信仰の正統　金壹圓參拾錢郵稅六錢
以上購讀希望の方は左記へ申込まるべし
東京市外品川町妙國寺內
大藏經要義刊行會
振替東京三一五九六番

統一定價

一冊	金參拾錢	送料一錢
一ヶ年	金參圓參拾錢	送料共

廣告料

一頁	金拾圓	前金の事
半頁	金六圓	
四分ノ一頁	金參圓半	

大正十一年三月廿七日印刷納本
大正十一年四月一日發行（第三百二十七號）

不許複製

編輯兼發行人　國友日斌
印刷人　鈴木日雄
印刷所　東京市神田區美土代町二丁目一番地　三秀舍
發行所　東京府荏原郡品川町南品川四百十二番地　統一發行所
編輯所　東京府荏原郡品川町南品川四百十二番地　統一編輯所
名古屋市中區新榮町四丁目十五番地常德寺內　振替東京五一〇七一番

目次

社會と教化（時言）……本多日生
法華三聖に關する感想……井上哲次郎
佛教と政道……本多日生
記事報道十數件……
法華經要文講義……本多日生

第廿六年五月號